

農村の変貌とその社会教育的課題

— 森本町八田調査第二次報告 —

昭和三十八年三月

金沢大学社会教育研究室

農村の変貌とその社会教育的課題

— 森本町八田調査第二次報告 —

昭和三十八年三月

目

次

農村の変貌とその社会教育的課題

— 森本町八田調査第二次報告 —

第一章 経営主のばあい	一
一 変貌の事実と分極化する農民像	一
二 変貌過程における農民の要求	六
三 農民の教育要求と学習課題	一一
第二章 主婦のばあい	一五
一 主婦の生き方・考え方	一五
二 主婦の学習課題	二一
三 学習活動振興の可能性	二六
第三章 青年のばあい	三一
一 変貌過程における青年の動態	三一
二 農業青年	三三
(イ) 転換期の農業に対する青年の姿勢	三三
(ロ) 農業青年の教育要求と学習課題	四一
三 通勤青年	四九

(イ) 通勤青年の労働条件	四九
(ロ) 通勤青年の教育要求と学習課題	五六
四 共通の学習課題と新しい学習集団の可能性	六四
あとがき	七三
調査のあゆみ	七九

農村の変貌とその社会教育的課題

—— 森本町八田調査第二次報告 ——

第一章 経営主のばあい

一、変貌の事実と分極化する農民像

(一) すでに中間報告で指摘されたいちじるしい兼業化の動向は、昨年にいたってさらに進行した。今回の第三次調査の対象とした経営主二〇名（経営面積別に抽出）についてみても、過去一年間に、わずか一名を除く一九名が他産業に従事している。（問一）その仕事の種類は、土木・建築工事の人夫がもっとも多く（一三名）、小企業の機械製作・修理（五名）その他であり、ほとんどが臨時採用のかたちをとっている。（他産業に従事しなかったM氏は、農協役員で、もしそうでなかったら、当然他の人達と同じように賃労働に出たであろうと推察される。）

したがって表1でもわかるように、耕作面積とか支柱労働力の多少にかかわらず、昨年はほとんど全員が他産業に従事したのであり、専業農家の数は、一昨年までにくらべて一そう減少し、実質的にはほとんどなくなってしまっている、といわなければならない。さらに、従事日数は、年間を通じて五〇日以上が大部分（一七名）であり、一〇〇日以上が半数以上を占めている。（問一）これなども、比較すべき過去の資料がないために、正確なことは断定できないが、ここ数年來の最大の数なのであろう。

「二・三年前では、『あの人だけ出かせぎに行かないだろう。』と思われ、また自分でも『わしは農業だけでやっていくつもりだ。』と語っていた人でさえも、働きに出るようになりましたからね。状況が逆ってきたんですよ。だから、八田のばあい、こうなることは不可抗力じゃないですかね……。」（M氏談）

表1 他 産 業 従 事 状 況

支柱 労働力	経営面積 ha	1 人	1 ~ 1.5	1.5 ~ 2	2 ~
			ha 人	ha 人	ha 人
他 従	2	3	7	1	2
産 業 事	3		1	2	1
	4		2		
非 従	2			1	

お宅のばあい、農業収入だけで一家が食っていく、農業収入だけで「できる」と答えたものは、わずかに二名（いずれも経営面積二ヘクタール以上）で、残りの一八名はすべて「できない」（一七名）もしくは「むずかしい」（一名）と答えている。

では、このような動向を支える農民の側の条件というのは、いったいどのようなものであるのか。われわれは、調査の結果、現在の八田における農家の二つの典型をT氏とO氏のばあいに見出したので、この二人に焦点づけて問題を追求していくことにしたい。

(一) 先ずT氏（三二才）のばあい――

耕作面積は七五アール、家族は妻と子ども二人の四人家族、数年前から金沢市内「富士プレス工業KK」に臨時工の身分で勤務している。農繁期に休暇をとるほかは年間を通じてほとんど毎日出勤している。したがって、T家の農業はいわゆる「主婦農業」となっている。

このような農家のばあい、農業経営だけで生計を維持していくことは、現在ではとうてい不可能であるというほかはない。たとえば、一〇アールあたり六〇〇kgの米の収穫があったとしても、T家のように七五アールの経営面積では三七年度の米価によれば、約三六万円の収入である。この中から生産に必要な経費（肥料・農薬代ならびに農機具等の購入費用）を差引くと、四人家族であっても、人間らしい生活を営むことはできないであろう。このことに関して、問(二)で「今の時勢で、

だから、T家のばあいでも、経営面積を拡げないかぎり、農業だけでは生計を維持することはできないのである。しかし、現実には、そのようなことを許さない。

「経営面積を拡げる、といったって、そんなことできません。土地を買いにしたら、あんだ、一反二四、五万でしょ。そんな金はないし、あったところで、わしのばあい、一反や二反買ってみたって焼け石に水のようなもんですよ。また、土地を借りるとしても、いまでは、わり損ですね。それよりは、現金収入の近道が現にあるんですからね。」(T氏談)

これがT氏が他産業に従事する理由である。T氏の賃金は日給四六五円、それに超過勤務手当が平均七、八〇円つくというから、月収一五、〇〇〇円程度にはなる。こういう生活条件であるだけに、経営面積をふやすということは全く考えられない、というのである。同様な条件は一ヘクタール未満およびその前後の経営面積を有する農家に共通したものであった。T氏(二ヘクタール、四一才)、A氏(二・一ヘクタール、三三才)、S氏(二・一ヘクタール、三八才)、K氏(〇・七二ヘクタール)もほぼ同じような事情を語り、農業経営の拡大についての意欲は全く消極的であった。

ところが、それなら、他産業従事によって農業経営を縮小しないしは放棄しようとしているのか、というと、そうではない。この点について再びT氏の言を聞こう。

「そりゃ、農地を手ばなしでもいいですよ。しかし、あとが心配だね。ひょっとしたら不景気になって、いまの工場がつぶれて、どこも使ってくれん、ということになったら困りますからね。そういうときには七反ちよっとの田んぼをつくっていけば、まず食べるだけのことはできますからね……。」

これは当然の不安である。七五アールの農地は、T家の生活のいわば安全弁なのである。しかし、その安全弁がかえって、賃労働者としての意識を不徹底なものにしているし、農民としての自覚も不明確にしているのである。生活におけるいわゆる二重底意識が、このような生活基盤の上に成り立っているのである。

表2 O家の購入機具・機械

(1959年現在の資料)

種 類	数量	(イ) 新調価	耐用年数		年償却額 (イ)	備 考
			(ロ) 経過	(ハ) 将来	(ロ)+(ハ)	
石油発動機	1	56,000円	4	6	5,600円	38,000円を 5人で負担 210,000円を 7人で負担
電動機	1	16,000	8	6	1,143	
脱コク機	1	23,000	3	5	2,875	
中耕除草機	1	860	5	0	170	
噴霧機	1	7,600	1	4	1,520	
人力撒粉機	1	1,000	5	2	143	
荷車	1	15,000	7	5	1,250	
みすり機	1/6	7,600	7	3	760	
動力耕耘機	1/4	42,000	1	6	6,000	
木舟	1	48,000	8	0	6,000	
小舟	1	5,000	4	4	625	3,000円を 5人で負担 8,500円を 5人で負担
昇降機	2	19,000	5	5	1,900	
唐箕	1	4,200	5	10	280	
米選機	1/6	600	10	0	60	
電力装置	1	8,000	1	11	667	
田植機	1	3,200	5	2	457	
台秤	1/6	1,700	4	11	113	
バボチン	1	9,000	4	6	900	
製氷機	1	500	6	6	42	
俵しめ機	1	15,000	7	5	1,250	
	1	1,600	2	12	133	
計					31,888円	

(三) これに対して、O氏(三八才)のばあいは対しよ的である。

O氏の所有耕地面積は一・四ヘクタールであるが、昨年は請負耕作地が二〇アールあり、合計一・六ヘクタールを経営したという。O家の家族は七人で、経営面積がさほど多くないのにO氏は昨年まではほとんど他産業に従事しないで、農業経営の分野で精力的に研究をつみ重ね生産を高めてきたのであった。この点で戦後の八田における新しい農民像の典型と思われる人である。

しかし、このO氏でさえも、昨年はのべ五ヶ月にわたって賃

表3 農協貸付金 (37年4月現在)

耕作面積	戸数	貸付金	1戸平均
～1ha	76	22,352,000 円	294,000 円
1～1.5ha	80	32,885,000	411,000
1.5～ ha	31	3,502,000	415,000

労働に従事したのであった。(バス・ボディを製作しているK産業・臨時工として) その理由はどのようなものであったのだろうか。O氏によると、(一)水害による米の減収、と(二)農機具・機械へ投資した返さい金の返却が必要となった、この二つの条件が主なものだ、という。

(一)の水害による減収というのは、O氏のばあい、約三〇俵分であった。これは金額にすれば、約一三万円に相当する。この一三万円を他産業に従事することによって補わねばならなかったわけだ。(O氏の一日の労賃は七〇〇円であるから、のべ五ヶ月でも、一〇万五千元にしかない。)

ところで問題は、(二)の理由である。O氏は埋立て地の購入とが機具・機械類に対するあきらかな過剰投資の実情を次のような資料にもとづいて説明された。(表2参照)

「とに角、土地を買った金をかえすほかにこれだけのものが必要であるわけです。おそろく私のばあいがこのむらで典型的なんでしょうが、………これですと、埋立ての借金とあわせて年八万円を償還しなければならぬのです。これはもはや米作りだけではむりですよ。」

O氏が自らを典型、というように、八田の農家はおそらくどこでもこの程度の機具・機械を必要とし、それをまかなうために、年間相当額の償還をつづけているのである。さらに、埋立その他に要した費用は農協の貸付金によってねん出したのであるから、この金額も少ない。三七年四月現在の資料によると、その内容は次のようである。

この二つの資料は、投下資本の償却がかなりの重荷であることをあきらかに示すものといわなければならない。問題はこの償却が、農業経営のみでは出来そうにないところにある。O氏はこの点について

表4 今後の生活をどうするか。

(イ) 他産業に従事する	17名
(ロ) 資本投入で生産性を向上する	0
(ハ) 経営面積を拡大する	3
(ニ) その他(蓄産)	1

「経営面積をふやしたいと思いますが、資金がないわけです。この点、政府が低利金融政策をとってくれるべきですね。また、米価政策にしても、やはり生産者米価をあげて、消費者米価だってあげてしかるべきですよ。」

と語った。O氏が当面している問題こそ、まさに現在の日本農村の矛盾であろう。O氏は、たしかに過去一年のべ五ヶ月他産業に従事したけれども、基本的には、農業経営の領域で農民としての生活をきりひらいていこうとする姿勢をかるうじてとらうとしている。こうした姿勢をとろうとする人々の数は、われわれの調査によれば、意外に少なかった(二〇名中三名)が、八田の農業の将来はやはりこの少数の人々の動きによって規定されていくにちがいない。

二、変貌過程における農民の要求

すでに指摘したように、T氏には農業経営に対する積極的意欲はもはや感じとれない。したがって、農業経営に関する知識は貧弱である。もっぱら、妻にまかせつきりであって質問として用意した①反あたりの肥料代、②投入労働のべ日数の項目に対しても「ノー・アンサー」である。

「そういう計算はしたことないですかわかりませんね。農業簿記ですか。つけていません。うちはぜんぶ、ジャーマ(妻)まかせですが、あれもそういうことは知らんでしょ。……」

しかし、農業問題そのものについて無関心か、というとうそうではない。米価審議会が非公開になり、生産者代表の主張が以前より軽視されることになりそうだ、ということなどには新聞を通して関心を寄せているし、村の将来についても不

安をもっている。ところが、T氏のような立場の人からは、八田の今後について積極的な提言を聞くことはできなかった。

「八田のばあい、何といっても耕地が少ない。しかも多角経営は不可能でしょ。村落構造からして落座なんかできっこないですよ。それに資金がないですしね。」

「多角経営」「村落構造」といったテクニカル・タームがこの人の口から聞かれるが、けっきょく、傍観的な評論家の見解がのべられるだけである。したがって、これらの人々は、ここ数年、急速に進行した兼業化の動向を「止むをえない」ものとして受けとっているのである。だから、農業経営改善のための要求はこういう人達の中から出てこない。

これに対して、さきにも述べたように、O氏のような農業で自立することを意図している人達からは、さまざまな要求が出される。O氏が低利金融政策を政府がとるべきであると述べたことはすでに報告したが、農協役員のM氏は、これと同時に、政府が農産物の価格保障政策をとるべきだ、と強調した。この価格保障政策を具体化しないかぎり、農業基本法という「選択的拡大」ということも、現実には不可能であり、農業の構造改善も進行しない、というのである。事実、M氏は数年前、共同で養ケイを試みたが、飼料費高と、卵の価格暴落で失敗した、という体験をもっているだけに、価格保障政策が具体化しなければ「手も足も出ない」という。

前回の調査で、政府の農業政策に対する要望として、①米の統制をはずさないでほしい、②早場米奨励金をなくさないでほしい、といういわばネガティブな要求しか出されなかったことを報告したが、（「社会教育研究」第二号七九ページ）それに比較すると、たとえ一部の人とはいえ、右のような積極的な要求が出されてきつつあることは注目し値する。この人々には、今後の八田の農業についての展望がえがかれはじめてるのである。

M氏も加わって行った森本町の「農業構造改善」のための調査結果によると、八田において確保できる季節労働者の数

は、男一三九名、女八三名、計二二二名である、という。(この数字は景気変動その他によって変化するから不安定である。安定した数字は五〇名前後だ、という) この季節労働者の賃金を、もし男八〇〇円、女五〇〇円として計算すると、年間二千万円を必要とする。これとみあう農業経営には、M氏によると豚五〇頭、にわとり三五〇羽、肥育牛二〇頭を米作をするかわら飼育する、ということが必要になってくる。しかも、米作の分野では、農基法という協業化がおしすすめられなければならないというのである。

八田の農業の今後をこのように構想すると、さまざまな問題がたちあらわれる。さきの価格保障政策が実施されることは絶対に必要であろうし、季節労働者の恒常的確保が必要となってくるし、共同経営にふみきる農民の意識変革ということも課題となってくる。さきの調査結果をみると「共同経営をやるうと思いませんか。やるとすればどんな型ですか。」という問に対する答は次のようになっている。

- | | |
|-------------------|-----|
| (1) 稲作だけの共同経営 | 三四名 |
| (2) そさい作だけの共同経営 | 一〃 |
| (3) 家畜部門だけの共同経営 | 二〃 |
| (4) 経営全部を共同経営 | 七〃 |
| (5) 共同経営にしようと思わない | 四〇〃 |
| (6) 無解答 | 四五〃 |

(全数二二六名)

この数字をみてもわかるように、M氏等の構想が実現していく、意識の次元における条件は成熟していない。この点O氏なども、共同経営よりも自主経営の路線で、農業は発展すべきだと述べていた。

「わたしは共同経営には期待しませんね。やはり生産というものは個人経営がもつともあがるんじゃないですか。ソ連のコルホー

ズやソホーズをみてもそういうことがわかんと思うんです。社会主義国の農業が不振だというのは、その辺にわけがあるんじゃないですか。」

ここでO氏の社会主義農業についての理解を問題にしなければならぬだろうが、それよりも、O氏やM氏が、当面している問題をどのような政治的筋道によって解決しようとしているかをうかがってみたい。両氏とも、農協に期待を寄せる。農協が政治的プレッシャーグループとしての性格をつよめることによって自分達の要求が政治に反映する、と考えるのである。

「そりゃ農民組合をつくることだって考えられないわけではないですがね。しかし、それよりも農協という農民の組織があるんですから、これをつかわなければだめですよ。それに、われわれの要求がわかってくれるSさん（自民党）のような人を代議士に出すことですよ。社会党なんか、いうことだけいっていますが、わたしらにはピンときませんね。自民党にも不満はあるけど、そうかといって社会党支持に変わる、ということは考えられんですね……。」

これがO氏やM氏の論理である。農協にそれだけの期待（農民組合にかけたい期待）をかけるかどうか、そして、保守党の代議士を出すことで農民の要求が国家の政策に反映すると考えていいかどうかは、当然吟味されなければならないのだろう。しかし、革新政党がこうした農民からの支持をとりつけないままであることも一そう重要であろう。（八田における総選挙対の革新票は一割程度だという。しかもそれは主として在村通勤青年のものである。）

農協の果している役割については、O氏やM氏とは全く異った立場からの批判があった。

「いまの農協に期待をかけることは無理ですよ。だって、農協は富農、中農の人たちの立場を代弁するでしょうが、われわれ零細農家には、ほとんど役立たないのではないのでしょうか。たしかに借金があります。けれども、その借金があることによって、われわれの農協に対する批判的発言が封じこまれているんですよ。」（丁氏談）

こうした意見があるところを見ると、農協が果しうる役割というものには、やはり限界がある、とみるべきだろう。農

協が客観的には保守党の支持基盤をつくっている事実も否定できない。ただ、T氏のような批判が、農協に対する卑なる不満にとどまっていって、それをどう変革していくか、というところへ及んでいないところにも限界がある。他産業従事者の農民としての要求が、分散させられていることに問題があるのだ。経営主対象の調査の結果からはこのような問題を克服する方向はつかみとれなかった。

しかし、総じて、農民の政治意識は、変化しつつあるといえる。本調査の中の「共通問題」で、政治に関する質問を用意したのだが、「政府や農林大臣は、農民の立場を真剣になつて考えてくれているから、農業政策についてわれわれがあれこれと心配する必要はない。」という見解を肯定した経営主は二〇名中、わずかに一名であり、はっきり否定した人は七名である。これなどは、保守党を選挙の時には支持しながらも、保守党政府の農業政策にはあからさまな不信を表明した数字である。一方、農民としての権利意識は深まっていることが次の質問の答からもうかがえる。

「町会議員や国会議員は、選挙によつて選ばれたのだから、そういう人達のやることにとかく文句を言うべきではない。(共通問題②)

そうだ……

二名

いちがいにはえない……

八名

ちがう……

一〇名

わからない……

〇

「米の値段は政府が決めるたて前になっているのだから、農民がむしろ旗を立てて要求運動するのはよくない。」

(共通問題④)

そうだ……

〇

いちがいにはえない……

二名

ちがう……

一七名

わからない……

〇

その他……

一名

このような結果が示す農業政策への不信や農民としての権利要求は、政治に対してどう反映させらるべきであろうか。これは、八田の農民自身がとりくまねばならない重要課題である。

三、農民の教育要求と学習課題

『百姓には学問はいらん』というのは大変なまちがいですよ。百姓をやるが故に、学問が必要だ、といいかえなければなりませんよ。」

これはMさん（四四才、一・七ヘクタールの専業農家）が強調したことばである。将来他産業に従事しようとするものと、また専業農家として自立しようとするものも、共通して「百姓には学問はいらん」ということをきっぱりと否定する。（肯定したのはわずかに一名）

したがって、子女の進学に対する希望も、ほとんどすべての人が子どもを高校以上に進学させたいと願っている。数年前までは八田では、高校への進学率は一ぱんに低かったのだが、最近にいたって急速にこれが向上してきたのである。

「わたしら、これぐらゐの土地を子どもにもゆずったって、子どもはくっていきませんわ。やっぱり、学問をさせてやって、くっていきけるような腕をつけてやらんきゃいけないと思っています。だから、本人がのぞめば、高校だけといわず大学へも行かせたいと思っているんです。」

（A氏談）

おそらく、こうした見解が、いまの八田では一般的になりつつあるだろう。

表5 子どもの進学について

中学校だけでいい	1名
できれば高校へ	1
高等学校まで	6
できれば大学まで	8
大学まで	1
その他 (男は大学まで 女は中学まで)	1

ところで、教育の中味については、どのような要求が出されてきているだろうか。これについては、さきのO氏の語ったことばを紹介しよう。

「いままでの農業だったら、親といっしょに小さい時分からしてきた仕事の中でひとりで身につけてきた知識でやってこれたかもしれません。しかし、いまではそんな程度の知識では全くだめですね。たとえば、トマトの栽培にしても、トマトという植物のもっている特性や、その病理なんかについて専門的な知識がないと作れませんね。すべての物がそうです。畜産にしてもそうです。だいいち、われわれには全然予備知識がないんですよ。いってみれば、あらゆる生物の成長・発達についての学問とか、植物病理学でもいうんですか。そんな学問が必要ですね。」

これはまことに適確に現在ならびに将来の農民にとつての学習要求を把握した発言だといえる。かつてO氏が受けた戦前の学校教育はもちろんこうした学習要求に、戦後の教育にしては、戦前の要素的知識の注入、暗記をもっぱらとした理科教育を想起すればわかる。戦後の教育にしても農業生産や労働とこのようにかかわりあう科学を重視したとは決していられない。事実、O氏は「子ども(中学生)の教科書をみて、どうもピンときません。」とのべている。社会教育の課題も、じつはこのようなところにも横わっているのだが、果してこうした要求に應えてきたであろうか。検討を要する重要な問題である。

さて、このような学習要求はO氏以外の人ではどうとらえられたであろうか。さきにもふれたが、T氏のような他産業従事の方に生活の比重がかかっている人達からは、これはど具体的に話が聞かれなかった。やはり、農業にどれほどシアリ阿斯にとりくんでいるかのちがいがいかかっているのだろう。ただ、質問(9) (いま、その筋の専門家と呼んで話をきくとすれ

ば、どんな話をもっとも聞きたいと思われませんか。)の答を整理すると、次のようになる。

表 6 テ ー マ 希望した人数

①	日本経済はどうなるか	7
②	税金のしくみ	3
③	貯金と株	0
④	農業の機械化	4
⑤	人生と宗教	6
⑥	農薬と肥料	4
⑦	農業経営の合理化と農業簿記	4
⑧	子どもの教育	2
⑨	政府の農業政策	8
⑩	国際情勢	5
⑪	その他	2

これによると、農業の技術的分野における問題（機械化とか農薬・肥料等）よりも、「日本経済はどうなるか」とか「政府の農業政策」の方が、学習課題として意識されてきている、といえそうである。やはり、変貌過程にある農村の問題は、そうした巨視的な動向を見きわめることなしには考えられない、という自覚が深まってきているのであろう。

O氏やM氏との面接では、西欧ならびに北欧諸国の農業近代化とか、北欧諸国の農業政策の話が出た。これらの人々にとっては、当面している農業問題を、そうした世界的視野の中で考えていく発想さえ育っているのだ。ただ、さきにもふれたが、

たとえば社会主義農業についての知識や、先進資本主義諸国の農業近代化政策についてのインフォメーションは、必ずしも科学的とはいえないし、ある時には断片的である、といわねばならないだろう。そこにも、経営主にとっての学習課題があるはずである。

とはいえ、そのような学習課題が客観的に存在するとしても、これが果して、調査の対象となったこれら「経営主」の人達によって学習されていく可能性・すじ道が考えられるのであろうか。現実には、こうした学習のための組織とか学習集団というものはない。O氏やM氏のすぐれた意識やさまざまな知識は、学習のための集団で得られたものではなく、個人的学習（雑誌「家の光」とか「地上」等）、あるいは、農協役員としての活動を通じて獲得されたものである。そこにO

氏やM氏の限界があるのであろう。日本の農村がいま当面している諸問題は、いわゆる農業の近代化政策だけでは解決されない矛盾をはらんでいる。八田でも「農業を近代的企業として成立させる」ための農業構造改善の事業が農協の組織を通して手がけられようとしている。O氏やM氏は、おそらくこうした近代化の事業を推し進めるにあたっても、いわば中核的役割を果していられるにちがいない。しかし、こうした人達の視野の中に、たとえばT氏のような立場の農民の問題はどう位置づけられていくのだろうか。

また、T氏のような他産業従事者は、いかなれば、農民から労働者に変わりつつある、という事実をどう自覚しているだろうか。八田の農業問題もまた、こういう異った立場の人々を統一的視野の下におさめつつ解決されていかなければならないのである。そのようなかたちでの解決を誰に期待すべきか、そう考えたときO氏やM氏に代表されるこの村の進歩的な遺産を継承・発展させるべき、より若い世代に注目しなければならぬだろう。八田の青年に、果してそうした期待がかけうるかどうか——この問題の解明は、青年を対象とした調査結果の分析にゆだねたい。(中野 光)

(付 記)

調査を実施し本稿をまとめ終えてからすでに一年を経過した。この間に、八田の農業をめぐる条件はさらに変化した。農家の農業による素収入にはさしたる増加はみられないが、生活における消費の水準(生活水準とはちがう)は上がざるをえなかったし、物価の値上りはつづいた。これらの条件はそれまで意欲的に農業にうち込んでいた少数の人々までもいやおうなしに、他産業従事においやつたのである。ここで考察の対象にしたO氏なども調査時期における氏の構想を発展させることができず、現在では他産業(製造業)に出ている。そうした動向が決定的になった時に、農業構造改善事業をここ八田で実施するかどうかの決断を迫られたのである。八田の農民は改めて、自分達の農業をどうするかという問題を日本経済の動きを視野の中におさめながら検討することを迫られている。(一九六三、四、二二)

第二章 主婦のばあい

一、主婦の生き方・考え方

(一) 変貌する農村の象徴的表現として、「主婦農業」(北陸では「母ちゃん農業」といわれる) という言葉が使われているが、近郊農村である森本の八田(この調査後、六月一日には森本町が金沢市に合併されたので、八田も金沢市八田町と呼ばれるようになったが) のばあいにも、この変化は顕著である。調査対象主婦二〇人のうち、専業農家は二人に過ぎないが、これらの農家にあつてもすべて主人は農閑期には土建会社の臨時雇として農外収入獲得に努力している。したがって、専業農家といつても農外収入の全くないような農家はほとんどなくなっており、専業農家と一種兼業農家との差は紙一重となっている。今日ではもはや、この間に厳密な一線を引くことは事実上困難になっているといつても過言ではない。このような変貌傾向は、第一次調査から今次調査までの約一年半の経過の中にも顕著である(くわしくは、経営主の項参照のこと)。

対象農家二〇戸のうち、専業農家もしくはこれに準ずるもの二戸、一種兼業農家一三戸、二種兼業農家五戸と分れるが二種兼業農家を除く一五戸についてみると、農閑期にその夫が土建労働者として就労するもの九戸である。その期間は二カ月から六カ月とかなり巾があるが、冬期の屋外労働という特殊条件に左右されて就業日数は概して少なく、年間総収入は一〇万円前後(最高二二万円最低三万円) に過ぎない。主婦の兼業状況をみるに、対象者全員のうち内職として「むしろ織」をするもの四名、土工三名、工員三名、保健婦一名となっており、その収入は最高九万円(農繁期を除き、常勤の鉄工所工員のばあい) 止まりである。「むしろ織」の収入は二万円前後(かなり控え目の数字) だとは思われるが(というし、土工のばあいも年間収入一万円程度という

ものもいる。したがって、主婦農業にもっぱら従事していると思われる残りの九名（経営面積が最低のばあい）とともに、これら兼業従事のもの的大半（常勤に近い二、三名を除いて）は農業経営を主として担当する、真の意味での支柱労働力となりつつあるものということができる。

もつとも、一種兼業のばあいでも、右に記したように、経営主の兼業程度は低く、概して農閑期に限られるから、主婦が独力で農業経営を切廻してゐるとまではいえない。しかし、経営面積がかなり大きいこれらの農家にとって（最大二町一反、最小一町三反）、兼業化の進行が主婦達をある程度多忙ならしめてゐることは否定できないと思う。これは、機械化や農業の進歩による労働力節減の効果を相殺するものといつてよい。もちろん、大家族のところでは父母が健在で、農業の手伝いになり、家事を切盛りしてくれるところも多いようである。だがそれにしても、兼業化の皺寄せは多くのばあい主婦に集中する結果となっている。このように、今日では農家における主婦の役割は相対的に高まってきたけれども、主婦の農業経営に対する意欲はそれほどには高まっていない。依然として、夫の指導の下に、いわば農業労働者として耕作に従事しているに止まる。田植えや稲刈りのように家中総動員のばあいはもとより、除草、農薬散布、施肥など管理期間中の主要作業についてみても、これを計画し指示するのは、もっぱら経営者としての夫であり、主婦がこれにとつてたつたという事例はほとんどないようである。また、機械に関する知識の修得を前提条件とする耕運機の使用も、この地区ではまだ主婦から敬遠され、休日休暇の夫の仕事とされている。兼業労働の日雇いの性格もさることながら、農村の変貌に対する主婦の構えにも問題が残されている。

(二) こういった受身の態度は、農業経営の収支に関する数量的把握を妨げ、経営改善への要求を眠らせる結果となつてゐる。主婦はやはり農業経営に関する限り傍役でしかない。多少は生産性が低下しても止むをえないといった意識、そこまで行かなくても、増収を考える必要はなく、せいぜい現状が維持できれば結構といった意識、これが八田の主婦達を支

配しているように思われる。大多數の農家は、農業の発展策ということには見切りをつけ、収支のアンバランス是正は手取り早い貸金収入で、という考え方になっている。そうしたばあい、主婦はもはや留守番でしかない。留守番は主人の指示通りに保管に万全を尽しさえすればよい。積極的なミスがなければその任務は完了する。多くの主婦にみられる、右のような受身の姿勢は、主婦達の学習課題を検討するに当って見落せない要素だと思われる。

端的にいつて、時代は動き農村は一大変動期に際会しているが、これに対応する主婦の動きは鈍い。動いていないわけではないが、どちらかといえば時代に引ずられた形以上に出ていない。

主婦達の問題意識の欠如は、家族関係や家事の面にもみられる。戦後一七年にもなると、農村の封建制にも一応メスが入れられ、窒息するような嫁姑の關係、小姑の嫁いびり、あるいは頑として譲ろうとしない親爺の權威などといったものは、大分影が薄くなっている。したがって、戦後、青年団や婦人会が好んで取上げ、また精力的に取組んだ封建制の問題は、一応解決したものと考えられている。もちろん、こうしたものが一朝一夕で解決済になるはずはなく、外部の者が一歩踏込んで問題を掘下げてみると、まだまだ遺制や残渣は根強く残っている。それだけではない。ばあいによつては、外部の圧力に反応してただ形を変えたに過ぎないような事例さえみられる。二〇才台の主婦について家計の掌握状態を聞いてみたところ、対象者四名のうち三名は義母が家計を握っていると答えた。(残りの一名は、両親をともに亡くしているから対象外ともいえる)その一人、Hさんはいう。

「姑に任せた方がいい。いずれ、私の代が来るだろうから、その時まで待つつもりです。家計を握ったら、いろいろ改善しようとは思っているが、具体的には考えたことがない。」

Hさんのところでは水田二町歩を経営している。両親も健在なせいでもあるが、Hさんは農閑期には臨時工として旧市内の鉄工所に働きに出ている。家計が苦しいという理由からではなさそうだ(八人家族だから、生活は楽だというわけ)。H

さんは現金収入が必要だからというし、外へ働きに出ると楽しいともいつている。どうやら、これが本音ではなからうか。だから、主婦の解放が真に完了したといえるかどうかは問題である。しかも、本人達は解決を迫られるような問題は解消してしまったと考えているのだから、始末が悪い。

(三) 婦人会の指導的地位にあったNさんやKさんも、現在では婦人会の必要性については疑問を抱いていると述べている。

「ひところ、婦人学級の流行時にはこの村でも結構盛にやりました。合会に出ることに別に障碍はないが、皆に意欲がありませんね。最近ではテレビやPTAの講演などで知識の吸収には事欠かないから、自然に熱が冷めています。若妻学級もいつとはなしに自然消滅してしまいました」

この談話にあるとおり、婦人会がその事業として婦人学級を主催するということは、この一兩年はほとんどみられないようである。もちろん、婦人会の唯一の事業が講演会形式の承り学習の推進ということではいいわけではない。小集団の討論学習を基盤にした、学習と実践との結びつきがなければ、婦人会活動は精彩を欠き、会そのものが上からの伝達機関に過ぎなくなってしまうであろう。そういった反省が全国的になされて、今日では承り学習の時代は過ぎたともいわれている。八田のばあいにも、そういった動きがみられるであろうか。石川県下の各地には、そのような芽生えもかなり活潑だというが、ここでは全く形をひそめている。旧森本町で中央学級が計画され、皆から希望テーマについてアンケートもったとのことであるが、八田の婦人の関心は依然として低いようである。夫を勤めに出している主婦農家の一人であるAさんは、このことについて次のような批判をしている。

「この頃は出稼ぎに行く人が多いから、婦人学級があっても昼間は出席できないし、また夜開かれたとしても勤め人は疲れて出にくいと思う。森本の中央学級をやるという話だが、八田の公民館の集りにもよう出んのに、森本でやるなら、とても難しいという意

見がある。」

他の被調査者の意見も大同小異であった。誰一人として婦人学級の開催を切望した者はなかったし、打開策に腐心しているという回答も得られなかった。皆一様に、学級活動の不振を多忙なこと、とくに出稼ぎのせいにする傾向が強かった。しかし、こうした態度は裏返してみれば、誰もが解決を迫る差迫った課題を持合せていないこと、たとえ課題があるにしても、それが主婦に共通するものとなりえていないことを示している。主婦に尋ねると、誰もが最小限二町の水田は欲しいというし、専業農家として立っていきける方法はないだろうかと思ひ悩んでいる。また、兼業化に魅力を感じている者でも、夫が現在のような不安定な職場でなく、定職にありつけないものかと考えているようである。しかし、組織をもたず、しかも集団として発言し行動することに抵抗を感じる傾向の強い農村の主婦として、これらの人びとは各自別々に悩み、各人それぞれに精一杯の努力を重ねているだけに過ぎない。共通の課題を持ち寄って、共同討議し学習を積んだ上で、皆で解決の方向を見出そうとする意欲は盛上ってきていない。こうした状態の反映で、婦人会（農協婦人部と事実上、一）の活動もきわめて鈍い。

（四）八田婦人会は前記のように八田農協婦人部と一体をなしているが、非農家を含めて全世帯（約二二〇世帯）の主婦が構成員となっており、会費は年額一〇〇円とされている。このほかに事業収入（農協事業部の下請機関として共同購入）があるため、財政は割に豊かであって年間予算は約一二〜三万円という。事業としては、資金稼ぎの性格も兼ねた、右の共同購入のほかに、環境衛生の整備を目的とした、ハエ・蚊の共同駆除毎月一回実施があるだけのようである。したがって年に一〜二回の農業講座が催されたとしても、予算の大半は薬品代に消費され、残りは懇親会費の援助資金として利用されているのではないかと推定される。わが国の地域婦人会の大半がそうであるように、八田のばあいも踊る婦人会といった形容が酷であれば、親睦団体としての性格を強く持つていっているといつて差支えあるまい。ただ新しい試みとして、三十六

年度より購買貯金を始めて農家經濟の合理化に乗り出していることを注目せねばならない。従来農協事業（購買）部からの購入はチケット制による無計画購入となっていたため、端境期になると赤字になる農家が多く、次期完渡代金で決済するという悪弊があった。今後は米穀年度の始めに一定額の預金をなし、その範囲内で購入することによって、家計支出に計画性をもたせて合理化を計ることになったとのことである。農協を通ずる消費物資の購入割合がさほど高いとは考えられない近郊農村ではあるけれども、かかる運動の意義は決して軽視されてはならないであろう。

さて、他方、婦人会活動とかなり関連性の深いPTA活動はどうであらうか。八田小は以前からの一村一校制によるもので小規模のせいか学校給食も実施していない（（食は自宅に食べに帰るのが、古く））。森本中が町の統合中学校として近代設備の給食施設をもっているのと対照的である。しかし、主婦達に聞いてもあまり必要性を感じていないようだし（（寄付金の割当を恐れ——小規模だけに実施となれば多額に上ることが予想される。森本中のばあい、當局の側にも熱意はないということである。普通でも、一戸一五〇〇円という——給食費の負担増大を嫌っているのが本心か？））、当局的側にも熱意はないということである。普通のPTAなら当然問題となりそうなのが見送られているところに、このPTAの性格が現れているように思われる。PTAとしてのめばしい活動は行われていないようであるし、親と学校との結びつきも毎月一回の授業参観に限られるという。学級懇談もほとんど行われなし、毎学期末の通知表受取の際に教師との個別懇談形式がとられているに過ぎないとのことである。「PTAや授業参観にはよく出かけますか」との質問に対しても、約半数の主婦は、「忙しいから」とか「こどもが小さくて手が離せないから」といって弁解する。そうした雰囲気からは、子供の教育を中心課題として手を握り合おうという空気は生まれまい。ここでも主婦はバラバラなのだ。

だが、そうした主婦達も、「子供の教育について、あなたはどの程度してやりたいと思っていますか」という問を個別的に投げかけられると、低所得層の一部を除いてはほとんど一様に、「少なくとも高校までは」といい、「できれば大学までやりたい」という。これが單に學歷偏重の社会に順応する姿勢だけから出た答でないことは、次表によって裏書され

表1 この頃は農家でも高校へ出すようになってきたが、百姓をやるなら中学だけでけっこうだ

年令	～24	25～34	35～44	45～	計
そ　う　だ い　ち　が　は い　え　な　い ち　が　う わ　か　ら　な　い	8	1 4	2 1 7	1 1	3 2 20 0
計	8	5	10	2	25

二、主婦の学習課題

(一) 右にみたように、変貌する農村の主婦達にとって解決を迫る課題は決して少なくないが、それはそのまま主婦達にとつての学習課題だといつてよい。にもかかわらず、現に学習意欲が至つて低調なものも事実だ。それは主として、主婦達が自分達の抱く要求を明確に自覚していないこと、および、欲求充足の手段方法について考えをめぐらすという思考方法になれていないことなどに原因しているといつてよい。そこでこうした点を考慮した上で、学習課題の所在を検

よう。ただ、いかなんことには、こうした教育要求が個別的に処理されているだけで、全体の共通した問題になっていない。高校全入運動にしても「試験がなくなったら勉強しなくなりはいないか」という漠然たる不安を抱く者のほかは、概してこれを支持している。しかし、これを積極的に支持して運動に加わろうという気分はほとんどみられない。「義務制にすべきだ」という主張さえもある。だが、これも他力本願だ。政治家や他人が適当にやってくれるだろうとしか考えていないようである。だから、問題は誰がどうすれば運動に火をつけることができるか、という点にあるようだ。八田の主婦達にとつても、さまざまな要求はあるし、政治への不満はある。いや、それどころではない。農村の将来に対するいい知れぬ不安は濃い。むしろ、それあるが故にとまどい、積極的対策を持たぬままに暗中模索している現状である。

討してみよう。

その第一は、農業経営の数量的分析であろう。主婦農業の様相を濃くするに至った現在では、主婦も「数字でものをいう人間」になる必要があるし、少なくとも、わが家の農業収入や農外収入が年間およそどれだけの額になるか、肥料代や農業代に農業機械の原価償却費の概算はいくらかなどについて、数字的把握ができなければならないはずである。しかし、面接調査に当たったわれわれの印象では、米の收穫高（何俵と）は当然知っていても、そのほかの数字を即座に回答しうる者はなかったようである。一町四反を経営するOさん（三六才で、夫は農閑期中働きに出ている）の答——「そんな算用したことないわ。みんなお父ちゃんまかせてやってきたし、今さらおぼえようとは思わんわねえ」は、こういった空気を代表する、そのものずばりの発言であつた。こうした農家では、経営の実権はいつまでも夫のものでしかないし、主婦はつねに補助的役割しか果たせないであろう。そうしたばあい、夫は農業を主とした、臨時的な日雇労働者として不安定な職場に就業するほかあるまい。

もちろん、兼業農家だからといって、経営規模の大小にかかわらず主婦が農業の主導権を握らねばならないという必然性はない。現在の農業技術を前提とすれば、一・五町以上の農家では依然として夫が経営の宰配を振わざるをえまい。しかし、それ以下の経営規模のところでは、幼児の世話ができる祖父父母のいるような家庭なら、十分主婦農業の成立が可能なはずである。八田でも、そういう農家は少なくない。にもかかわらず、そうした農家の主婦に簡単な経営計算すらできないとあつては、事態は深刻である。主婦農業という姿が主婦になにがしかの労働過重を強いていることは動かし難い事実であつてみれば、農村の理想像を画くばあいには主婦を農業経営者として位置づけることには再検討を必要とするとしても、差当つて現在の問題としては、主婦が数字に強くなること以外に発展の途は開けまいと考える。

その第二は、農村の将来を中心とした政治・経済の学習である。政府の農業政策に対する不信任は主婦のばあいも意

表2 政府や農林大臣は農民の立場を真剣に考えてくれるから、農業政策について、あれこれ心配する必要はない。

年令	～24	25～34	35～44	45～	計
だにはい			2	1	3
うがいな	3	1	3		7
そいちえ	4	3	5	1	13
いいがう	1	2			3
わからない					
計	8	6	10	2	26

外に大きい。しかし、これも漠然たる不安の段階に止まっている。どうすれば打開の方策が見出せるか、農村の将来に関する青写真はこうだと明快にいい切る者は皆無といってよい。農業基本法は農業生産の選択的拡大と生産性の向上を唱い、農業の近代化による自立経営の育成と協業の促進を目標としている。しかし、八田のような水稲単作地帯の農村（日本全体としても、こうしし、最も問題を）では、どのようにして脱皮を計るべきか。政府も教えてくれないければ、農民自身も問題自身のもつ深刻さをはつきりとは認識していないようである。だから、別表に見られるように、主婦達の回答もはなはだ心許ない。半数近くが「わからない、考えていない」というわけだが、これはすべて主婦農業の範疇に入る人びとなのである。もっとも、農政が一番遅れているといわれている

現在では、主婦達に右の解答を求めること自体に無理があるとも考えられないわけではない。しかし、分らなければいっしょに勉強してみようという気運ぐらいいは出てきてもよいはずである。ことに、自立経営の線は二・五町だとか三町だとかいわれている今日、これらの農家は皆失格組に入らざるをえない状況に追い込まれているだけに、いわば死活の問題なのである。都市の主婦達よりも一歩を先んじた政治学習や経済の勉強が必要だと考えられるの

表3 農業を割のあうものと
するための方策は何か

大	3
拡	1
の	1
同	1
分	1
合	1
の	2
徹	7
底	
培	
増大(兼業による)	
現金収入の増大	
わからない、考えていない	

※ 第二種兼業の主婦を除く

である。中小企業に働く二三男の賃金は、なぜ一人前の生活費を賄うに足りないか、お父ちゃんの職場はどうして安定しないか、米価はこれ以上値上げの余地はないものか、肥料代や農業機械代金の値下げはできないものか、農業に対する低利資金の融資はなぜ増大しないのか——ひろいあげれば学習の課題はいくらでもあるし、また、そのどれもが明日の農業のあり方にかかわっている問題なのである。

政治に信頼をもちえないでいて、しかもなお、誰かがやってくれるだろう、その内になんとかなるだろうという依存的态度——こうした矛盾から脱却しえないでいる主婦達にとっては、自分達の姿自体が学習の課題でもある。

(二) さらに、主婦にとっては固有の課題がある。右に述べた生産担当者としての主婦の課題が過渡的なものであるかどうかの問題は、容易に決着がつけられそうにないし、ここで論ずべき限りでないが、家事合理化や家庭における妻の座改善の課題は、主婦達にとっては本質的なものであり、ある意味では永遠の課題というる。さきごろ、ある新聞の婦人欄の投書に「私は農閑期の臨時工」と題して、群馬県に住む二児の母親が電機工場に勤め激しい労働の明け暮れの中にも、給料の半分以上を自由にできる喜びを記した一文が載っていた。

「思えば、なんとあわただしい、目まぐるしい私のからでしょう。しかし私は、この生活の中からさやかな喜びを得たのです。それは、こうして農閑期の内職で得たお金をおしゅうとめさんから半分づついただいて少しづつ貯金を始めたのです。その額はほんとうにわずかなもの。でも私には何にもまさる宝玉なのです。ふだんはとも子どもたちの要求に応じられぬ私は、こんな時、思いきって子どもたちにその要求の一品ずつを贈るのです。」

この女性には、毎日の労働の激しさについて、「与えられた仕事に忠実たらんと懸命に目をみはり、手を動かしても、ともすればスーッと地底に引き込まれるような眠気におそわれたり、肩はこり、首すじは痛み、足は棒のようになってからだが硬直してしまいそうです」と記していた。この投書には早速反響があった。東京の一主婦は、「農村の男性は

どう考える？」と題して次のように反問した。

「苦しみを喜びに代えて働く心はりっぱだと思うが、私にはただ「えらい」といってほめられない気がする。これは、もう現代の婦人の生き方ではない。こんなにして働く給料も、半分はしゅうとめに出してしまふという。嫁を、妻を牛馬のごとく働かせてしゅうとめも夫も平気でいられるのだろうか。都会の主婦の私から見れば理解しがたいことだ。……農家の嫁はつらいということがよくわかった気がする。これでは農家の嫁のなり手がないのは当然。農村の男性はなんと考えているのだろうか。」

こうした農家の主婦の姿は、決して特異なものではなさそうである。さきに記した八田の主婦Hさんの回答もなる程これを裏付けているように思われる。してみれば、「農村の男性はどう考える？」と問うと同時に、「農村の主婦はなにをしている？」との問が発せられて然るべきものであろう。男性の理解もさることながら、主婦自身に問題解決への積極的姿勢がなければ、妻の座の改善は期待できないことは明らかである。

(三) このほかにも、農家の主婦にとって解決を迫る課題は数多くある。冠婚葬祭の簡素化・合理化なども生活改善運動の一環として唱えられてから久しいが、最近では逆戻りの現象も見られるという。古くからの慣習に根ざすものであり、世間態を考慮せねばならない複雑な問題であるだけに、根気強く皆の共通問題として運動を展開せねばならないが徹底した討議と実行方法への工夫などにまだまだ遺憾がないものかどうか。衣食住の合理化というようなことにしても中途半端に処理されてしまっている感じがする。たとえば、家計簿の問題にしてもそうである。「あなたは家計支出について予算をたてていますか」との問に対しては、「たてていない」という答が圧倒的に多かったが、その理由としては、「おおよその見当がついているから」と並んで、「予算をたてても守れないから」という項目をあげた者が多かった。これをさらに突込んで聞いてみると、こういう返事である。

「去年は家計簿をつけてみたが、今年はやめてしまった。期待した効果はなかった。妻が予算を立てても、夫が協力してくれねば

なんにもならない。折角苦心してやりくりしているのに、夫が勝手に持出すようでは、だらくそう（馬鹿らしく）な。

これでは、生活改善への取り組みは至って不徹底というほかはない。また、臨時の出費で崩れるともいっている。そうした無駄を排除するところに、家計簿記入の目的があるはずなのであるが。もつとも、切詰め過ぎた予算しか組めないところに真の原因が横たわっているのかも知れないが、そうした訴えも聞かれなかった。つまり、ほんとうに考え抜くという生活態度は身につけていないようだ。

子供の教育にしてもそうだ。それは大事なことでと誰もが考えている。しかし、先に記したPTAの活動振りから見ても、八田の主婦達はどうみても教育熱心だとはいえそうにない。森本中の評判では、八田の子は他部落と比較して割に好成绩だとのこと——主婦の一人はこういつて満足感にひたっていた。疑問の起きないところに進歩発展の契機はない、とよくいわれている。探り当てる気持さえあれば、いくらでも横たわっている数多くの課題、八田の主婦達は漫然とこれを眺め、不安げに日々を送っているようだ。しかし、これはなにも八田の主婦に限ったことではあるまい。農村の主婦の大半はこうした状態を出ていないと思われる。

三、学習活動振興の可能性

(一) 以上のような状況下にある主婦達の学習活動を振興させる鍵はなにか。これに答えるためには、現在の沈滞を招いた諸原因を確かめることから始める必要がある。

八田の婦人学級活動を振り返ってみてまず気のつくことは、この村ではかつて自主的な話し合い学習の組織をもった経験がないということである。過去に行われた婦人学級のすべては、講演会中心の承り学習であった。このように受動的学習態度に終始してきた婦人達にとっては、自分の抱いた疑問を積極的に解明し、共通の課題解決のための実践に乘出す

空気は生まれなかった。したがって、マスコミ文化の浸透に伴って知識欲は満たされ、おのずから講演会場への足は遠のいていったという次第である。

また、この村では婦人達の間には有能なリーダーが育たなかったことが大きな原因となっている。男性のばあい、戦後において背壮年を中心とした改革運動が目覚しく行われ、村をあげての埋立事業が推進されて村を豊かにした実績と比較して対照的である。主婦達の間にはこれといった動きはなかったようである。それには、主婦達の結束を否認なしに促すような、この村特有の弊害が過去に存しなかったことが関連しているように思われる。村政の腐敗が極度に達していたということもなかったし、犯罪者の少ないことが自慢になるように、格別非難に値する非行もなかった。民主化の風潮に乗って娑追放を叫ぶ必要もなかった。主婦達の眼には太平無事としか映らなかった。それとともに、小さな不満や要求を組織するような、オルガナイザーがいなかったことも事実である。村の青年達が仲間から町会議長を送出し、村政を始めとして一切の村のリーダーシップを大正生れの者で掌握したようなエネルギーは、主婦達の中に生まれなかった。また、それを組織するリーダーが出なかった。

さらに、八田の主婦達にとっては、外界との接触による刺激の少なかったことも、かなり致命的であったと思われる。男性のように軍隊経験をもたず、一村一校制の下で教育された彼女達は他村の女性と接触する機会も少なかった。出稼ぎに行くことも少なかったし、通婚圏も狭かった。かつて潟から獲れた魚のふり売りに主婦が出かけた、という体験はあるが、彼女達は八田で生まれて、そこで育ち、八田の男性の下に嫁いで、八田から出て生活する機会もなかった。閉鎖的な社会の空気しか吸わなかった主婦達に、進取の気性を望むこと自体に無理があるとも考えられるのである。しかし、こうしたヴェールは最近では大巾にはがれつつある。八田の主婦達も村の外に出て、村を客観的に眺める機会が漸次大きくなってきている。

(二) 以上に記したようなマイナス的要因は、今日の八田でも大して変っていない。それだけに八田の学習活動を振興し、実践活動へと転化させる努力は実り難い環境にあるといえる。だが、逆説的にいえば転換期にある農村として、とくに最大の苦悩を背負われている典型的な日本農村の一つとして、八田には他所よりも豊富な課題が横たわっているといえることができる。だから今ここで必要なことは、現在の農政の方向を大きく修正させるような政治要求の組織化であり、そのための学習活動の振興であろう。かかる共通目的を明確に設定し、農民の漠然とした不安感を転回させて積極的なエネルギーを引出すこと以外に社会教育活動の任務はあるまい。農村としての八田を取巻く悪条件や農民の消極的姿勢を嘆いてばかりいても、何の解決策も見出せるものではない。また、これまでの農村社会教育の主流をなしてきた、生産技術教育だけをひっさげてきても、農民の心を、主婦の関心を引きつけることにはならない。今の時代に即した学習のテーマを提示し、主婦達の学習意欲を促すことを肝要であろう。

また、学習活動は学習する者の能動的な働きかけを待つて始めて成功する。したがって、主婦が寄合ひ話合う場がなければ、学習活動は育つ道理がない。ところで、八田には公民館がある。広狭合せて三室あるから、会合の場所に事欠くわけではなさそうである。それに新しく竣功した農協センターにも集會室は三つ設けられている。だが、主婦に聞いてみると、友達同士話合う機会はあまりないという。共同風呂で世間話をし、子供の教育問題などについて、あれこれ雑談する程度に過ぎないといっている。しかし、これでは井戸端会議の域を出ないし、話合ひ学習の芽が育つという期待ももてそうにない。八田の男性にはクラブの伝統がある。そのクラブも現在では積極的役割を果していないようであるが、これには点火すれば燃え上る素地があると考えられる。有能なリーダーさえ育てば、働きかけの場は準備されているともいえる。これに反し、主婦達にはそのような連帯組織はない。したがって、話合ひの場を積極的いきり開いて行くことがこれから考えられるべきであろう。前記のように、施設が格別不足しているとは思われないのである。一

学年一クラス三〇人未満の小規模学校としての八田は、PTA活動の展開などには恰好のものといえる。横の連携はPTA組織の活用からでも可能なものではあるまいか。

(三) さらに、動きに乏しいとみられる八田の社会にも、いくらかの新しい芽生えがないわけではない。これまで秋祭りは男中心の飲食いに終始し、果ては芸者を入れてのドンチャン騒ぎの傾向があったが、一年前からNクラブでは、主婦の提唱で夫婦ともどもの会合をもつようになったという。男性側にすれば、おしかけ女房式のサーブスでは面白くないかもしれないが、主婦が看視しているから、芸者と連立って旧市内へ二次会に出かけることもなくなったとのこと。来年の厄祝いには夫婦揃って関東方面の旅行を計画しているとの話である。このように、八田でも古いしきたりを破る試みがなされ、一部にはすでに成功を収めている事例もあるのである。徒らに、農村の遅れを嘆くには当たらないと思う。こうした動きを一部のものに留めておかない工夫こそが、現在では大切であろう。

さきに紹介した農協婦人部の購買貯金運動なども、これからの活動の基盤となりうる積極的な試みとして評価すべきである。生活改善運動といえば、次のような話も聞いた。この地方では、嫁の実家から孫の世話をするという慣習があり、それだけに「娘三人もったら家が潰れる」ともいわれている。この村では生活改善運動の結果、孫の世話は誕生後一年間に限定することになったが、それでも、産着・誕生のお祝から、数度の節句、お盆、正月などの贈り物と近所への見栄を含めた出費は相当な額に達するという。「農村に嫁のきてがない」といわれる今日、そうした無駄を排除するための今一段の努力が必要であろうが、主婦達の間にそうした反省が高まりつつあるとのことである。

こうして注意深く見れば、たとえ潜在的なものであると、新しい芽がないわけではない。われわれの調査は、こうした芽を探り当てることを狙ったものであった。この試みは十分に成功したとはいえない。しかし三次にわたる調査で主婦にとっても、いかなる課題があるかということはおぼろげながら知ることができたし、静かな動きに火をともし工

夫いかんによつては、新しい躍動を期待できるのではないかと考えることが可能になった。これから、われわれは、主婦達の自主的な学習意欲の向上を刺激するための、有効適切な措置について、地域の特殊性を考慮した検討を加えねばならないと考えている。

第三章 青年のばあい

(第二次までの調査では、青年を対象としたものはきわめて部分的、断片的なものにすぎなかったので、今回の第三次調査においては、青年に関係する部分は、構想と方法を再検討して、基礎的な悉皆調査をも含めて新たに実施することにした。以下はその総括的な報告である。)

一、変貌過程における青年の動態

近年における農村の急激な変貌は、何よりも端的に青少年の動態に反映している。高校進学者の増加と勤労青年の就業構造の変化——農業に従事する青年のいちじるしい減少と離農者（「在村通勤」青年と「離村」青年）の急増——は、全国いたるところの農村に共通に見られる現象である。八田の青年もおそらくその例外ではないであろう。そこでまず、最近五カ年間に於ける八田の青少年の進学・就職の動向を調べてみよう。

第一表が示しているように、八田においても中学を卒業して高校に進学する者の数は最近二、三年間にはつきりと増加の傾向を示し、ほぼ全国水準に達している。（昭和三十七年三月の卒業者の進学率は五九％）これに反して、中学を出てただちに家業（農業）に従事する者は減少して、最近二カ年の男子卒業者では皆無になっている。また、就職者の就職先はほとんど県内で、後で報告するように、その大多数が金沢市の中小企業に勤めて、自宅から通勤している。高校卒業者の進路については、絶対数が少いために、最近の傾向を指摘することは困難である。

ところで、今回の調査を行った昭和三十七年二月現在で満一五才から二五才未満の在村勤労青年一二六名（該当年令

表 1 中 学 卒 業 者 の 進 路

	進 学 者			就 職 者			家事従事者			不 明			計		
	男	女	計(%)	男	女	計(%)	男	女	計(%)	男	女	計(%)	男	女	計(%)
32年3月	10	5	15(41)	6	2	8(22)	4	9	13(35)	0	1	1(2)	20	17	37(100)
33年3月	3	6	9(26)	6	2	8(23)	7	11	18(51)	0	0	0	16	19	35(100)
34年3月	4	3	7(33)	7	1	8(38)	2	4	6(29)	0	0	0	13	8	21(100)
35年3月	8	6	14(52)	2	1	3(11)	3	7	10(37)	0	0	0	13	14	27(100)
36年3月	5	9	14(56)	1	6	7(28)	0	1	1(4)	1	2	3(12)	7	18	25(100)

表 2 中 学 卒 業 者 の 就 職 先

	男				女				計
	県内	県外	不明	計	県内	県外	不明	計	
32年3月	6	0	0	6	2	0	0	2	8
33年3月	6	0	0	6	2	0	0	2	8
34年3月	5	1	1	7	1	0	0	1	8
35年3月	0	0	2	2	0	1	0	1	3
36年3月	1	0	0	1	6	0	0	6	7

者総数一八六名から在学者三〇名と他出者三〇名を除いた数) の就業形態を概観すると、表5の数字になる。男子の家業従事者はすべて、農業に従事するかたわら、近くの工場で臨時雇として働いたり、人夫仕事などに従事していて、農業に専従する者は皆無であるが、この報告では「農業青年」と呼ぶことにした。女子の家業従事者は、家事の手伝いが主で、農繁期に農業を手伝う程度である。勤労青年の大多数を占めている

勤め人 (男子の六九%、女子の九一%、全体では七八%) は、いうまでもなく、在村「通勤青年」の部類に属する。

改めて論ずるまでもなく、勤労青年の生活意識と教育要求は基本的には、かれらの労働条件によって規定されているから、以下の報告においてまづ八田の青年を農業青年と通勤青年の二つのグループに大別して、全員を対象とする基礎調査(調査票による)と約四分の一の抽出面接調査の結果に基づいて、最近の変貌過程のなかでのかれらの生活意識と教育要求

表 3 高 校 卒 業 者 の 進 路

	進 学 者			就 職 者			家事従事者			不 明			計		
	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計
32年 3 月	0	2	2	0	2	2	0	1	1	1	0	1	1	5	6
33年 3 月	0	0	0	3	2	5	0	0	0	0	0	0	3	2	5
34年 3 月	0	0	0	2	0	2	0	0	0	2	0	2	4	0	4
35年 3 月	4	1	5	5	5	9	0	0	0	1	0	1	10	5	15
36年 3 月	0	0	0	2	4	7	0	0	0	1	1	2	3	6	9

表4 高 校 卒 業 者 の 就 職 先

	男				女				計
	県内	県外	不明	計	県内	県外	不明	計	
32年 3 月	0	0	0	0	2	0	0	2	2
33年 3 月	1	1	1	3	2	0	0	2	5
34年 3 月	2	0	0	2	0	0	0	0	2
35年 3 月	1	3	1	5	2	2	0	4	9
36年 3 月	2	0	0	2	5	0	0	5	7

表 5 在村勤労青年の就業形態

	男	女	計
	実数(%)	実数(%)	実数(%)
家業従事者	15(31)	3(9)	18(22)
勤 め 人	33(69)	31(91)	64(78)
計	48(100)	34(100)	82(100)

(総数 126名中回答者は82名で、回答率=64%)

(1) 転換期の農業に対する青年の姿勢

二、農 業 青 年

の動向を探り、そのなかに見られる主要な社会教育的課題を考察してみよう。

今回の調査によると、昭和三十七年二月現在で、八田で農業を主な職業としている満二五才未満の青年は約一五名で、

表 6 農業青年の年令別・経営規模別構成

年令 経営規模	18	19	20	21	22	23	24	計
～6.99反	0	0	0	0	0	0	0	0
7 反 ～ 9.99反	0	0	0	1	0	0	0	1
1町 ～ 1町4.99反	1	1	0	2	0	2	1	7
1町5反～1町9.99反	0	0	3	0	0	2	2	7
2町～	0	0	0	0	0	0	0	0
計	1	1	3	3	0	4	3	15

在村勤労青年の約二〇％に当たっている。(男子青年だけの比率では約三〇％になる)過去の正確な資料は得られなかったが、他の農村と同様に農業に従事する青年が年を追って減少していることは、村のおとなや青年との話し合いによっても推定することができた。

表6は八田の農業青年の年令別・経営規模別の構成を示しているが、学歴は全部が中学卒で高校を卒業して農業に従事している者が一名もないこと、満一八才以下の農業青年がいないこと、すなわち最近二、三年間の新規学卒者で農業を主な職業としている者が皆無になっていることが注目される。

ところで、この報告でたびたび指摘しておいた八田におけるいちじるしい兼業化の進行は、とくに農業青年の就業状況にはつきりと現われている。すなわち、

農業青年一五名中農業専従者は一名もなく、全員が農業のかたわら年間を通じてかなりの日数他の仕事を兼業している。その内訳は、工場の臨時雇が八名(被面接調査者八名中四名までが金沢の日本冶金工場で「季節工」(季節労働者)として働いていると回答した)、人夫仕事四名、大工・左官仕事一名、その他(河北潟での漁業)が二名で、農繁期の二、三カ月を除いて、年間の各月にわたって相当日数兼業に出ている(表6参照)。

表 7 農業青年の兼業従事状況

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
月間10日以上他の仕事に出た人数(総数15名)	11	11	11	5	4	8	10	8	1	7	14	15

表 8

農業青年の農外収入とその使途

金額 (年間)	人数	使 途	人数
1 万～3 万	2	1. ほとんど全部家計に入れている	7
3 万～5 万	2	2. 一部家計に入れている	4
5 万～10 万	4	3. ほとんど全部自分の小使いにしたり、自分の貯金にしたりしている	3
10 万～	7	Z 無 答	1
	15		15

青年におけるこのような兼業化の進行は、経営主や婦人の場合と同様に、(1)機械化の進行の結果農業労働力に余剰が生じたこと、(2)近年の経済界の好況にともなつて他産業の労働力需要が増大したこと、(3)農機具への投資や生計費の上昇のために各農家が農外現金収入をますます必要とするようになってきていること、などの理由によることはいうまでもないが、八田の農業青年の農外収入の金額とその使途は、第八表のとおりで、年間一〇万円以上の収入をあげている者が約半数に達しており、しかもその収入をほとんど全部家計に入れている者が約半数にのぼっていることは、後で改めて問題にする農業青年の農業にたいする意欲や姿勢と無関係ではないように思われる。

さて、これまでの八田の農業は、加賀平野の多くの農村と同様に、ほとんど水稲単作に終始していた。「あなたの家で現在米作りのほかに力を入れてやっていることがありますか」の間にイエスと答えた者が、野菜が一名、副業としての漁業が三名あるだけで、残りが全部「なし」と回答していることが、はっきりとこの事実を物語っている。では、すでに農業基本法が制定されて、農業の近代化と合理化による生産性の向上、農業生産の選択的拡大、農業構造の改善などが日本農業の当面する大きな課題として謳われている今日、八田の青年はどのような八田の農業の未来像を描いて、新しい農業経営と農業技術に取り組もうとしているであろうか。

調査前にすでに察知されたように、明日の新しい農業に対する青年の姿勢は概して消極的・日和見的な段階にとどまっている。まず、「他産業との生産性の格差が是正されるように農業の生産性が向上すること及び農業従事者が所得を増大して他産業従事者と均衡する生活を営むことを期する」（農業基本法第一条）ためには、今後の自立経営農家の適正経営規模は、一般に二町ないしは二町五反以上と見なされているが、現在の八田の農家の経営規模はすでに報告しておいたように（「社会教育研究」第二巻、一八頁参照）二町未満が全農家戸数の九八%を占め、二町〇二町五反が二%、二町五反以上は皆無で、第六表が示しているように、農業青年が所属している農家の規模も、一町五反未満が半数以上である。ところが、八田の青年中、自家の経営面積を拡大して自立経営農家の適正規模に近づけたいと希望している者は、今回の調査では一名も見当らなかった。（六名の被面接調査者以外にはあるかも知れない）面接調査で将来の営農計画について話し合った際に、S青年（年令二二才で、現在七反の水田を母と二人で耕作しながら、金沢の工場で季節労働者として働いている）が「政府あたりから低利資金を融通してもらって、たんぼを一町五反ぐらいにふやしたいと思っている」と話してくれただけで、他の五名は全部はつきりと「現在以上に田畑はほしくない」と答えた。

このことは、経営主の章で報告しておいたように、八田の農家の大多数が今日なお、数年前の埋立と、その後の機械化のブームの波にのった機械・器具の購入とに要した負債の償還に追われている上に、農民の要望にもかかわらず政府その他の機関による低利農業資金の貸付が普及していないために、耕地の購入による経営規模の拡大が現実問題としてほとんど不可能に近いことによるものと思われるが、いずれにしてもこれまでのような一町前後の小農経営では、農業所得だけで家計の一切をまかなうことのできるいわゆる自立経営農家への途はほど遠いといわなければなるまい。八田の青年の新しい農業の展望が決して明るいものではなく、農業としんげんに取り組もうとするかれらの意欲が、少くも現在までのところでは概して低調であることは、以上の一事だけでもほぼ推察できるであろう。

表 9 農 業 青 年 の 将 来 の 営 農 計 画
(米作以外に将来力を入れてやってみたいと考えているもの)

耕作反別	将来の計画							人数
	なし	野菜	養鶏	養豚	肥料	酪農	その他	
7反～ 9.99反	0	0	0	0	0	0	1	1
1町 ～1町4.99反	2	2	0	1	2	1	2	7
1町5反～1町9.99反	4	1	0	2	0	0	0	7
計	6	3	0	3	2	1	3	15

(1人で二つ以上の計画を記入した者がいたため)
(合計は実数を若干上まわっている。)

もちろん、自立経営農家への途は、単に経営規模の拡大だけではなく、農業基本法にも示されているように、農業生産の選択的拡大や、多面的な農業構造の改善によってきり開かれるであろう。では、こうしたもろもの新しい農業の可能性に対して、八田の青年はどの程度意欲を燃やしているであろうか。

基礎調査で、「あなたの家で将来米作りのほかに力を入れてやりたいと考えたり計画したりしているものがありますか」と、将来の営農計画についてたずねたが、その回答は第九表が示しているように、野菜、養豚、肥育牛、酪農などが少しずつ散見された。しかし、面接調査の際に、そうした計画や構想がどの程度の具体性をもっているか、どの程度まで新しい技術や経営の学習によって現実的に裏づけられているかを探ってみると、その大部分はまだきわめて漠然とした希望や空想の段階にとどまって、ほとんど具体的に進められていないことが明らかになった。

一町八反の水田を両親と三人で経営し、両親が健在なので年間六カ月以上金沢の日本冶金工場で季節労働者として働いている二三才のM・M青年にたずねてみよう。

「これからの農業の計画といったって、わたしはまだあんまり真剣に考えてみたことはありませんよ。養鶏と養豚は村でも前にやってみて、失敗に終わった実例を見ているので、やろうとは思いません。できれば乳牛をいれるか、蔬菜栽培をやってみたいと

いう気持はあるんですが、問題は、資金よりも八田の土地条件にあるんじゃないでしょうか。米作りのほかに新しい経営をやろうとしても、八田はそうした土地条件に恵まれていないように思うのです。」

また、経営面積が一町一反で、同じく日本冶金工場に働きに出ている二一才のT・M君は、次のように話してくれた。

「耕地はこれ以上ほしいとは思わんですな。きょねんは大場（隣村）の出耕作分六反を処分してしまいましたよ。今から思うと、高い金をかけて埋立をして、たんぼをふやす必要がなかったように思うんです。……将来は水稻だけでなく、ビニール・ハウスでも作って、促成のナスかキウリでもやってみたいと考えています。……資金の心配は要りませんよ。たんぼを少し売れば、その経費ぐらいできるでしょうから。」

さらに、将来の新しい営農の構想として、共同化ないしは協業化に言及した青年が被面接者の半数にのぼったが、それも、「できたら家のたんぼは農協あたりに信託して、自分は本探となって工場で働きたい」（経営面積一町三反、上記のM・M君やT・M君と同じく日本冶金工場で季節労働者として働いている二〇才のN君の談）というのが本心のようで、青年たちがみずから率先して共同化を試みようとする積極的な意欲はほとんど感じとることができなかった。このように、八田の青年のあいだに共同化に踏みきろうとする意欲や動きがまだほとんど見られないのは、前述したようにこれまでの八田の農業が水稻単作で、共同化によって新しい経営を試みる土地条件にあまり恵まれていないことに基因しているように思われる。

さて、私たちは八田の農業青年にあまりにも過大な期待をかけて今回の調査を行ったと見られるかも知れない。たしかに、農業基本法が制定されているものの、それは日本経済の高度成長にもなって日本の農業が当面している基本的課題と、今後の農業が進むべき方向について、きわめておおまかな青写真を提示しただけにとどまって、農業の近代化

と農業構造の改善を推進しようとする農業政策が、十分な具体的施策に裏づけられて全国いたるところの農村に滲透するまでには至っていない今日の段階においては、農民だけに新しい農業に対する積極的な意欲と姿勢を期待するのは、もともと無理な注文というべきであろう。経営規模の拡大が必要であるといつても、それが現実問題として決して容易ではないし、また農業生産の選択的拡大を謳つても、新しい経営を試みる土地条件にあまり恵まれていない農村や農家において、おとなだけではなく青年自身にも、新しい農業に対する積極的な意欲が見られないのは当然のことかも知れない。農業の近代化や農業構造の改善がそれほど強調されても、それが強力な農業政策と具体的な行政指導によつて裏づけられない限りは、農民がその自力だけでそうした方向に農業の転換を試みることは至難な業であろう。しかし、このような事情を十分考慮に入れても、私たちは今回の調査において、八田の農業青年の明日の農業にたいする姿勢があまりにも消極的・日和見的にすぎるといふ印象を抑えることができなかった。

一昨年来北国新聞は百数十回にわたつて「朝をまつ農村」を特集して、県内各地の農村の変貌の実状を詳しく報道するとともに、農業の近代化や農業構造の改善に関する専門家の見解を掲載したが、いわゆる「七ヶタ農家」とか、「都市なみの生活ができる年収百万円以上の農業」といったようなキャッチ・フレーズも、八田の青年たちにとっては、条件に恵まれたどこかよその農村の富農の未来像としかうつらないで、そうした方向に自家の農業をきり開こうとする積極的な意欲と、その実現を目ざして先進的な経営と技術を学ぼうとする旺盛な学習活動をふるい起させるほどの実感をもつて受けとめられてはいないように思われる。もちろん、かれらには将来離農して賃労働者になろうとする意志はなさそうである。「今後もずっと農業をつづけるおつもりですか」との問にたいして、面接した青年の全員が「つづけるつもりだ」と答えている。しかしそれも、兼業農家として農業をつづけていけば、まさかの場合に食うだけには困るまいという程度のものであつて、前に報告しておいた「自分は本採となつて工場で働いて、農業は妻にやらせたい」とい

うN君の言葉が共通の本音のように思われる。

八田には、いわゆる農業生産の選択的拡大や農業構造の改善によって生産性の向上と農業所得の増大をはかる土地条件にあまり恵まれていない代りに、金沢に近接して（昨年六月行政上金沢市に編入された）、農業のかたわら季節的ないは臨時の労働者として余剰労働力を売る労働市場に比較的恵まれている。そのために、客観的に見ると、小数の富農層を除いて、中農以下の青年が「専農か離農か」の選択を迫られているにもかかわらず、八田の農業青年はこうしたきびしい現実との対決をできるだけ延ばして、急激な上昇が期待できない農業所得と他産業の所得との格差を、家族ぐるみの労働強化（農事の寸暇を惜んで兼業に出るという労働強化）によってカバーしようとする兼業農家の途を歩みつづけようとしているように見受けられる。

もちろん、日本の経済と農業の現段階において、「専農か離農か」の選択をいずれかに決断することは困難であり、今日の青年にそれを期待するのは無理であろう。しかし、こうした決定はしばらく将来に保留するとしても、上に述べたような兼業農家のきびしい現実のなかで、できるだけ自家の農業経営の近代化と合理化を目ざして頭を切りかえることが、すべての農業青年に要求されているはずである。このような前提に立って、私たちは試みに、八田の農業青年に経営主にたいする質問と同じく「肥料代は反あたりどのくらい使われますか」、「反あたり一人の人間が働いた」とすると、米がとれるまでに何日間働いたことになりましたか」とたずねてみたが、ふだんから自家の営農に合理的・計数的な頭を働かせていると首肯せしめるだけの正確な即答はほとんど得られなかった。「父が主に農業をやっている、私は父の指図で働いているので、分りません」と答えた二人の青年は別としても、他の青年もいずれもその場で鉛筆をもって計算しようやく回答を出す有様であった。基礎調査によると、家の農業経営について、(1)すべて自分がやっている者が一五名中八名、(2)一部まかされている者が六名、(3)すべてさしずをうけてやっている者が一名、という数字が出てい

るが、一家の農業経営をすべてまかされている青年にしても、また父に協力して共同で経営している青年にしても、ふだんから計数的な研究の上に立って、営農の改善を試みようとする形跡をはっきりと看取することができなかった。

さらに、基礎調査では農業簿記をつけている者が八名（内六名は本人で他の二名は父）、つけていない者が七名であったが、面接調査から判断すると、つけていると回答した青年でも、どの程度のものであり、またどの程度経営の合理化に利用されているかは疑わしいように思われる。

大体以上のような今回の調査結果と、第二次における若干の調査（「社会教育研究」第二号、六七—六九頁参照）から総合的に判断すると、農業を「おもな職業」と自認している八田の青年のほとんど全部に、少くとも今日までのところでは、転換期の農業としんけんに対決し、新しい農業経営や農業技術を探求して、農業の生産性の向上を計り、農業所得の増大に努力して、農業を専業としてそれに生きようとする姿勢はほとんど見られないで、むしろこれらの主要な関心が兼業労働による農外収入の増大に向けられているように見受けられる。

(四) 農業青年の教育要求と学習課題

八田の農業青年の農業にたいする姿勢が以上に報告したとおりであるとすれば、最近これらの間に農業に関する学習活動が以前に較べていちじるしく低下して、ほとんど停滞していることは、想像に難くないであろう。しかし、最近の学習活動の状況を報告する前に、いちおうこれらの学歴と、学校を出た後の教育の機会について述べておこう。

まず、基礎調査票に回答した農業青年一五名が全部中学卒で、高校教育を受けた者が一名も見当たらないのが注目される。数年前まで八田で高校に進学する者は概して少く、とくに家業の農業を継ごうとする者の中に高校進学者はほとんど皆無であった。それは、「百姓には学問はいらん」という古い観念のためというよりも、農家の大多数が中農以下で

子弟に義務教育以上の教育を受けさせる経済的余裕がなかったためと思われる。

もちろん、今日の八田の農業青年がかれらの学歴に満足しているわけではなく、面接した六名の青年のうち五名までが、「高校ぐらい出しておけばよかった」と述懐している。しかしそれも、これから農業に従事するためにも高校程度の教育が必要であるとの自覚であるというよりは、むしろ高校卒の学歴があれば、今ごろ家で農業をやらなくても、他にもっと有利な条件で働めていることができただろうというのが本音であるとすれば、そこにも大きな問題が残されているといえないだろうか。

つぎに、八田の農業青年は中学を出てから高校以外の教育機関にどの程度参加し、どのような教育の機会をもっているであろうか。一般的に見ると、勤労青年のために用意されている制度上の教育機関としては、高校の定時制・別科・通信教育を始めとして、各種の教育機関が考えられるが、これらの教育機関への参加状況を調べてみると、青年学級が一三名、社会通信教育（ラジオ講座など）が二名、各種学校が一名、その他が一名で、他は皆無の状況である。金沢には高校の定時制が三校、通信教育が一校設置されてあるが、一名も利用者がなかったのは、農業課程が設けられていないためかも知れない。いずれにしても、農業に従事する青年にとって青年学級がほとんど唯一つの教育機関であったことは、他の多くの農村と同様であろう。では、最近の八田の青年学級の活動状況はどうなっているであろうか。

石川県には、かつて全国にその盛況を誇った青産研（青年産業研究会）活動があった。そして昭和二十八年の青年学級振興法の施行後は、その伝統がそのまま青年学級に受け継がれることになり、とくに農村では、青年学級が青年の農業研究の場として相当活潑な活動を展開してきた。八田においても、青年団の青産研の伝統を受けついで青年学級が、八田出身の県農産課技師のM氏の指導を中心に旺盛な学習活動をくりひろげて、大きな成果を収めた一時期があった。そのことは、面接した青年がすべて口をそろえて、「数年前までは、青年学級でMさんから稲作の技術をいろいろと教わ

って、たいへん役にたった」と述懐していたことによっても、はっきりとすることができるといえる。

だが、八田の青年たちが青年学級に集ってかなり意欲的な農業学習を行ってきたのは、二、三年前までのことであって、その後そうした学習活動は次第に低下して、最近では部落の青年学級は自然消滅の状態におちいつてしまっている。そして、それに代って、昭和三十六年度から森本町の中央公民館に、中央産業青年学級が開設されているが、現在八田の農業青年でこの学級に学級生として登録している者は六名で、比較的まじめに出席している者は二、三名にすぎない状態である。しかも、その中央青年学級の学習活動も、農繁期を除いた各月一、二回の会合（話し合い学習）と、年に一、二回の一泊の合宿研究（学識者や専門家の講義を含む）と、年に一回の先進地見学旅行程度のもので、青年自身の自主的な学習意欲に支えられた活潑なものとはいえないようである。

上に述べたように、最近八田の青年たちの農業生産に関する学習が急激に低調化して、ほとんど停滞状態におちいつているのは、農業に従事する青年の数が八田でも減少していること、また、今日なお主に農業に従事している青年にしても、農外現金収入を得るための兼業労働に追われて、時間的余裕がなくなっていること、さらに、農業としんげんに取り組もうとしているごく少数の青年も、かつての青産研や青年学級における農事研究のように、これまでの小農経営のわくのなかで増産を計る篤農的な農業技術の学習だけでは、今日の農村や農家が直面している大きな力べをうち破ることができないことをはつきりと自覚して、専農か離農かの選択に迷っていることなど、多くの理由を挙げることができよう。とりわけ、農業基本法が制定されて、農業の近代化が日本農業の当面する最大の課題として強調されているにもかかわらず、その最大の障害たる小農制の限界をのりこえるための農業施策や農業指導がまだ政府によって具体化されてはおらず、農民自身にしても自主的な努力と運動によってその限界をのりこえる自信をつかむことができないで戸惑いを感じているところに、さきに報告しておいた八田の青年の農業に対する消極的・日和見的な姿勢と学習活動の停

滞の根本の原因がひそんでいると考えられる。そしてこのことは、単に八田の青年だけの問題ではなく、石川県内、い
な全国各地の多くの農村に見られる共通の現象といえるのではなからうか。

もちろん、最近多くの社会教育学者が報告しているように（『日本社会教育学会編『農村の変貌と青年の学習』参照）、先進
的な農村においては、共同化ないしは協業化という方式が、小農制のワクを超えて近代技術や近代経営を導入して農業
の近代化を達成する具体的実践として開始され、そうした共同化の試みを有力な手がかりとして、農林青年の新しい自
主的学習運動が展開されている。私たちもたとえ小規模ではあるが、石川県内においてこのような青年の自主的学習の
事例をいくつか見聞している。しかし、すでに言及しておいたように、たとえば農業生産の選択的拡大を目ざしてこれ
までの水稲単作以外の新しい経営を共同化の方式によって試みようとしても、そうした土地条件にあまり恵まれていな
いように思われる（この点については専門家の診断にまたなければそうとは断定できない）八田において、青年が農業の近代化
・合理化と本格的にとりくむ自主的学習のキッカケをつかむことができないで低迷していることは、無理からぬことと
もいえよう。

いずれにしても、私たちの調査によると、八田の青年の学習は近年低下の一路をたどっている。面接調査で農業青年
に、「このごろ自分から勉強したり、技術を身につけようとしていることがありますか」とたずねてみたが、イエスと
答えたのは六名中わずかに二名（水稲に関する技術が一名と新しい農業経営が一名）で、残りは「全然ない」と回答した。

だが、農業青年の学習がこのように停滞し、不活潑であることは、かれらが学習意欲をすっかり失って、何らの教育
要求をもっていないことを意味しないことは、いうまでもあるまい。その証拠に、前の問につづいて、「これから習い
たいとか身につけたいと思っておられることはありませんか」ときいてみると、イエスとノーの比率が逆転して、六名
中四名までがはっきりと、農業経営、農業技術、およびそれに結びつく機械技術、自動車運転などを学習したいと答え

ている。

以上のように、今日表面的には活潑な学習運動として現われてはいないが、内心では今日の農村がおかれているきびしい現実についてあれこれ考えをめぐらしながら、今後の農村と農家の生きるべき新しい経営方式と農業技術を探索している青年たちのひめられた教育要求にこたえて、こうした学習意欲を新たに発掘して共同学習の路線にのせて、自主的学習運動を再組織して指導するところに、八田の農業青年を対象とする社会教育の中核的な課題が横たっていると考えられる。

さて、以上の報告によって、八田の農業青年が当面している主要な学習課題は、その大多数がまだ明確には意識していないにもせよ、まず第一に、八田の農業の具体的条件（たとえば現在の経営規模や土地条件など）に即して、これまでの水稲単作の経営方式を改めて生産の選択的拡大を試みたり、その他の農業構造の改善を試みる可能性を農業経営的・生産技術的に探求してみること、第二に、そのために、さらに視野を拡大して、日本経済の高度成長過程のなかで中農以下がおかれているきびしい現実を科学的にみつめて、今日の兼業農家を自立経営農家の方向に転換する可能性があるかないかを経済的、政治的に学習することにあると考えられる。経済的にとというのは、資本主義の経済体制のなかで農家や農民がたどらなければならない必然の道を客観的・法則的に見きわめることを意味し、政治的にとというのは、農業基本法に象徴されている農業近代化政策とそれに内在する矛盾を見抜いて、もしもそれが富農層と一部の中農層のみを対象にして、小・零細農の自然淘汰ないしは切捨てを敢てしようとする性格のものであるとするならば、小・零細農の生きうる道を保障してくれるような政治権力の構造と政策をはっきりと把握することを意味している。

ところで、以上のような今日の農民が当面している大きな課題は、かなり専門的な農業経営と農業技術の知識と、さらにその基礎としての社会科学や自然科学の教養を農民自身が身につけない限りは、十分な解決が望めないであろう。

したがって、このような課題と取り組まなければならないこれからの農村青年の学習は、かつての青産研の伝統につながる青年の自主的学習集団や、これまでの部落単位の青年学級に期待することはできないであろう。なぜなら、吉田昇氏も指摘しているように（前掲『農村の変貌と青年の学習』参照）、近年農村の変貌が急激に進行してきた結果、数年前までに年長者がふんできた経験をこれからの年少者にくりかえさせる基盤がすでに失われており、とりわけかつて大きな役割を果たしていた青年団という学習集団も急速にそのエネルギーを減退させているからである。これまで部落青年団の内部にあって、それと表裏一体関係にあった小規模の青年学級が今日ほとんど開店休業状態にあるか、または自然消滅となっている事実は、はっきりとこのことも物語っているように思われる。

最近多くの農村で見受けられるように、離農して他産業に就職口を見つけるために高校教育を希望するというのではなく、今後農村にふみとどまって農業に従事して、明日の農業を背負って立つためにも、少くとも高校程度の教育が必要であり、この意味において高校全入制ないしは準義務化が望ましいことはいうまでもないが、さしあたっては、これまで農村青年の主要な社会教育的機関としての役割をはたしてきた青年学級を再編成して、その教育水準を飛躍的に向上させる方策が考えられなければならない。すでに報告しておいたように、八田の青年学級はここ二、三年間ほとんど自然消滅となっているが、八田の農業青年のなかには、森本の中央産業青年学級に登録している者が約六名、比較的まじめに出席している者が二、三名いる。たとえ少数であっても、これらの青年は明日の八田の農業を背負い、発展させようという積極的な意欲と熱意に燃えている青年であろう。これらの青年の農業への意欲と教育要求にこたえて、上に述べたような八田の農業が当面している課題の解決に役立つ高度の農業経営と農業技術、ならびにその基礎学力としての社会科学や自然科学の学習を行うことができる農村青年のための後期中等教育やそれ以上の水準の教育機関を設置して、新しい農村と農家の指導的後継者を養成することが、行政当局が当面している緊急な課題であろう。

右のような農村青年のための教育機関は、全体的ないしはかなり広い地域を単位として設置され、学校教育の形態をとって運営されるべきものであるから、広く各地の農村青年を集めて労働の余暇に農業学習を行わせる機関としては不十分であろう。そこで、右の新しい教育機関の設置と平行して、農村青年のための大衆的な社会教育機関として、これまでの青年学級を広域的に再編成して、その学習内容をレベル・アップする方式が推進されなければならない。

もちろん、たとえ広域的に再編成されても、現行の青年学級の制度と貧弱な経費のもとでは、青年学級に農村青年が直面している課題解決にこたえる十分な学習の展開が期待できないかも知れない。しかし、近年の農村社会の変貌に即応して農村青年のための教育制度を根本的に検討して、その改善策を提案することは、この調査報告では割愛することにしたい。（この問題については、『社会教育研究』第二号所収の「石川県における青年学級の現状と将来」において一つの要望と提案を試みておいたので、参照されたい。）

また、青年学級が勤労青年のためのなかば強制的な官製的な制度にすぎないと見たり、あるいは農村青年のための新しい教育機関において果して学習の自由が保障されるかいなかを危惧する一部の人は、今後の農村青年の新しい学習を農業青年のための新しい教育機関の設置や青年学校の再編成に求めないで、むしろ青年の自由で自主的な学習集団（サークル）の再出発に期待するかも知れない。しかし、すでに述べておいたように、農業青年の数がますます減少し、しかも農業にたいする積極的な意欲と姿勢をもった青年が各地の農村に散在している最近の状況のもとでは、小さな部落単位で自主的学習の支えとなる学習集団を再組織することはほとんど不可能になっているばかりではなく、かなりに可能であるにしても、かつてのように話し合いと経験の交流に終始するような学習集団では、ますます高度の専門的知識と基礎学力が要求されてきている農村青年の学習の場として、十分な成果が期待できないであろう。上に提案したような農村青年のための新しい教育機関や広域的な青年学級における学習が、おしつけ的なものであってはならず、あく

まで青年自身の自主的な学習意欲によって支えられ、かつ自由な学習権を保障するような性格のものでなければならぬ。ことはいうまでもないが、今後の農業青年の自主的な学習運動も、これまでの部落的セクショナリズムを打破して、広い地域の青年の連絡提携によって育成強化されていかなければならないと考えられる。

この調査報告を作成した後で、昭和三十七年二月二日に、石川県農産課が三十八年度の農業改良方針にもとづく事業計画を決定し、その中で相当画期的な農村青少年教育対策を計画していることを知った。それによると、「高校卒業生を対象に農学館、中学卒業生を対象に農業経営研修所（いずれも二年、入所人員二十人）を新設する。このほか（各普及所ごとに）中学卒業生を対象に月一回農業改良学級、高校卒業生を対象に年六回営農講座、年一回三十人を対象に農業機械研修会、（県単位に）年四回農業生産大学の開設、また二町村で農村建設班の編成、農村教育青年会議の推進、農業高校と農村改良普及事業との連携教育などを重点的にとりあげる。」（「北国新聞」昭三七・一二・一四日号による）

右の農村青少年教育施策は、私がこの調査報告で指摘したような今日の農村青年が当面している大きな課題にこたえようとする意欲から出発した画期的なものとして、大体において支持したい。（ただし、「農学館」という明治時代的センスの名称だけはいただけでない。高校卒業生を対象とする二年制の、しかも全日制の教育機関が、農業短期大学と格つづけることができない理由はないと思う。）

問題はただ、右のような農村青少年を対象とする画期的な教育施策が、これまでの農村社会教育行政体制と対立、競合することなく、相互に補強し合いながら円滑に実施されるように、県社会教育課と緊密な連絡、協議のもとに樹立されたいにある。これまでの経験に照らしても、役所間（大きくは中央の農林省その他と文部省）のセクショナリズム的な予算獲得と事業の縄張り争いがいたずらに現場を混乱させ、所期の目的を達成するうえでの大きな障害となっている事実を、とくにここで注意しておきたい。

最後に、農村の農業青年の学習課題は、いうまでもなく、農業生産に関するもの、およびその基礎学力と政治学習だ

けに限定されるものではなく、生活文化やその他さまざまな地域課題が考えられるが、農業生産以外の学習課題は農業青年と通勤青年に共通の課題として、この報告の最後で取扱うことにしたい。

三、通 勤 青 年

これまでの農村青年の学習は、いわゆる官製のな青年学級においても、また地域青年団の内部の青年自身の自主的学習集団においても、あるいは両者の合体した形態としても、農業生産に関するものが主要な内容を構成していた。しかし、近年在村通勤青年が急激に増加して、農業に従事する青年よりも圧倒的多数を占めるようになってきている都市近郊農村（後に明らかにするように八田もその部類に属している）においては、通勤青年の教育要求と学習課題にどのようにこたえ、地域においてこれらの学習活動をどのように組織し、指導するかという問題が、きわめて重要な社会教育的課題となってきたことは、改めて論ずるまでもないであろう。

私たちの今回の調査では、経営主および主婦との関連において、農業青年の調査にウェイトをおいたために、通勤青年に関する調査はきわめて不十分にか実施できなかったが、以下にその結果の概要を報告して、それについての私たちの見解を述べておきたい。

(4) 通勤青年の労働条件

通勤青年の生活意識と教育要求をもっとも大きく規定しているのは、いうま

表10 通 勤 青 年 の 勤 め 先

	会 社	個人経営	官 公 庁 校 学 学	計
男 { 数 (%)	24 (73)	5 (15)	4 (12)	33 (100)
女 { 数 (%)	14 (45)	15 (48)	2 (7)	31 (100)
計 { 数 (%)	38 (60)	20 (31)	6 (9)	64 (100)

表11 勤め先の企業規模

従業員数	男	女	計
	数 (%)	数 (%)	数 (%)
0～9名	2 (6)	5 (16)	7 (11)
10～29名	5 (15)	6 (19)	11 (17)
30～49名	2 (6)	4 (13)	6 (9)
50～99名	2 (6)	2 (6)	4 (6)
100～199名	2 (6)	2 (6)	4 (6)
200～299名	2 (6)	3 (10)	5 (8)
300～	12 (36)	5 (16)	17 (27)
無 答	6 (18)	4 (13)	10 (16)
計	33 (100)	31 (100)	64 (100)

でもなく職場の労働条件である。そこでまず、八田の通勤青年が、どのような職場の、どのような条件のもとで日々の労働生活を送っているか、かれの労働条件のうちに主要と思われるものについての調査結果を報告しよう。

(1) 基礎調査票に回答した通勤青年男子三三名、女子三一名の勤め先の種別は、第一〇表のように、男子は圧倒的に会社が多く、女子では個人の経営と会社がほとんど同数であるが、男女ともに官公庁・学校等がもっとも少ない。勤め先の規模（資本金と従業員数を記入してもらったが、資本金を回答した者は、男子の約三分の一、女子は個人経営の商店などに

勤めている者が多い関係上、回答者はわずかに四名にすぎなかった。

しかし従業員数だけでもほぼ規模の大小を推定することができよう）は、石川製作所と二、三のものを除いて、小規模のものが多く、とくに女子の勤め先は、予想どおり男子のそれに比較して、個人経営の小規模のものが多く、（第一一表参照）

大要右のような勤め先で、八田の通勤青年はどのような仕事をしているであろうか。第一二表はそのおおよその職業分類を示しているが、男女とも工員が第一位を占め、事務員がそれに次いでいる。

(2) 最近この地方の中小企業における労働時間や休日等の労働条件がかなり改善されてきているようであるが、八田の通勤青年のそれはどうなっているであろうか。第一三表の数字が物語っているように、かれらのこうした労働条件もかな

表12 通勤青年の職業分類

	男	女	計
	数(%)	数(%)	数(%)
1. 農 業	1(3)	0(0)	1(2)
2. 漁 撈 水 産	0(0)	0(0)	0(0)
3. 事 務	5(15)	11(35)	16(25)
4. 販 売 集 金 外 交 等	1(3)	1(3)	2(3)
5. 工 員	15(45)	12(39)	27(42)
6. 雑 役 (運搬, 配達, 小使など)	4(12)	4(13)	8(12)
7. 建 築 業 (大工, 左官, 運輸, 駅務, 接客など)	4(12)	0(0)	4(6)
8. (運送, 理髪, 接客など)	3(9)	0(0)	3(5)
9. (理髪, 接客など)	0(0)	2(6)	2(3)
0. そ の 他	0(0)	0(0)	0(0)
Z. 無 答	0(0)	1(3)	1(2)
計	33(100)	31(100)	64(100)

りよくなつてき
ている。しかし
週一回の休日
をもっている
青年が全体の
四割に達して
いても、勤め
先によつて休
日があつて
ちまちまにな
るため、金
沢への通勤に
なつて時間
を要する者
が相当ある

ために(第一四表の勤め先の所在地、および第一五表の通勤に利用する交通機関参照)、青年団の幹部には会合をもちにくいという悩みがあるようであり、また一般の青年からも、夜間の会合に出席しにくいという声がかなり聞かれた。

つきに、第一六表は八田の通勤青年の賃金を示している。三十六年十二月分の調査であるから、その後中小企業の待遇改善で多少上昇していると思われる。いうま

表13 通勤青年の労働時間(1日平均)

	8時間未満	8時間	8~9時間	9~10時間	10~11時間	11~12時間	12時間	無答	計
男 {数(%)}	5(15)	7(21)	12(36)	7(21)	0(0)	0(0)	0(0)	2(6)	33(100)
女 {数(%)}	1(3)	10(32)	15(48)	3(10)	1(3)	0(0)	1(3)	0(0)	31(100)
計 {数(%)}	6(9)	17(27)	27(42)	10(16)	1(2)	0(0)	1(2)	2(3)	64(100)

表14 休日

	週1日	月に2回 ~3回	きま まに いてい	ま な その他	無答	計
男 { 数 (%)	25 (76)	3 (9)	3 (9)	1 (3)	1 (3)	33 (100)
女 { 数 (%)	29 (94)	2 (6)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	31 (100)
計 { 数 (%)	57 (84)	5 (8)	3 (5)	1 (2)	1 (2)	64 (100)

家計に入れているのに対して、女子で家計を補助しているものが二〇%以下で残り自分の自由になっているのも、一般的な傾向といえよう。

(3) 職場での身分は、いうまでもなく、通勤青年の労働条件のなかでもっとも重要なものであるが、八田の青年は予想以上に本採用が多く、臨時採用はきわめて少いという数字が出ている。(第一八表参照) しかし、すでに報告しておいた

ように、中小企業に勤めている者が相当多数いるために、必ずしもこれらの地位

でもなく、賃金は学歴・職種・経年数・企業規模などによって異っているが、八田の通勤青年中低所得者が少くないのは、後で報告するように、男子の六七%、女子の八四%が中学卒の学歴で、かつ小企業に勤めている者が多いためであろう。面接調査の際に通勤青年に、「あなたの賃金は同年輩の友人などにくらべて高い方ですか、安い方ですか」とたずねてみたが、男子九名中五名が「安い方」、三名が「まあふつう」、一名だけが「高い方」、女子では七名中四名が「安い方」、二名が「まあふつう」、一名が「分らない」と答えた。最近の消費文化の氾濫のなかで、通勤青年の大半がめいめいの所得に満足していないのは、当然のことといえよう。

通勤青年たちが自分の給料をどのように使っているかを調べてみると、男子の約半数が、ほとんど全部かまたは一部分

表15 勤め先の所在地

	森本	金沢	その他	計
男 { 数 (%)	10 (30)	20 (61)	3 (9)	33 (100)
女 { 数 (%)	6 (19)	23 (74)	2 (7)	31 (100)
計 { 数 (%)	16 (25)	43 (67)	5 (8)	64 (100)

表16 通 勤 状 況

利用する 交通機関	バス	自転車	オート バイ	汽車	徒歩	その他	無答	計
男 { 数 (%)	24 (73)	9 (27)	2 (6)	12 (36)	2 (6)	4 (12)	1 (3)	33 (100)
女 { 数 (%)	28 (90)	0 ()	0 ()	4 (13)	1 (3)	1 (3)	1 (3)	31 (100)
計 { 数 (%)	52 (81)	9 (14)	2 (3)	16 (25)	3 (5)	5 (8)	2 (3)	64 (100)

(1人で二つ以上の交通機関を利用しているものがあるため)
合計は実数を上廻っている

表 17 通 勤 青 年 の 給 料 (36年12月)

	~4, 999円	5000 ~7,4 99円	7,500 ~9, 999円	10,000 ~12, 499円	12,500 ~14, 499円	15,000 ~17, 499円	17,500 ~19, 999円	20,000 ~ 円	無答	計
男 { 数 (%)	1 (3)	2 (6)	1 (3)	12 (37)	5 (15)	6 (18)	2 (6)	2 (6)	2 (6)	33 (100)
女 { 数 (%)	0 (0)	7 (23)	6 (19)	11 (36)	0 (0)	0 (0)	1 (3)	0 (0)	6 (19)	31 (100)
計 { 数 (%)	1 (2)	9 (14)	7 (11)	23 (36)	5 (8)	6 (9)	3 (5)	2 (3)	8 (12)	64 (100)

表 18 給 料 の 使 途

	ほとんど全部家 計に入れている	一部分家計に 入れている	ほとんど全部自分の小 使にしたり自分の貯金 にしたりしている	無答	計
男 { 数 (%)	9 (27)	8 (24)	12 (36)	4 (12)	33 (100)
女 { 数 (%)	4 (13)	2 (6)	22 (71)	3 (10)	31 (100)
計 { 数 (%)	13 (20)	10 (16)	34 (53)	7 (11)	64 (100)

表 19 職 場 に お け る 身 分

	本採	採 探		季節雇	見習	不明	その他	計
		1年以上	1年未満					
男 { 数 (%)	26 (79)	1 (3)	2 (6)	0 (0)	2 (6)	1 (3)	1 (3)	33 (100)
女 { 数 (%)	29 (94)	1 (3)	0 (0)	0 (0)	1 (3)	0 (0)	0 (0)	31 (100)
計 { 数 (%)	55 (86)	2 (3)	2 (3)	0 (0)	3 (5)	1 (2)	1 (2)	64 (100)

が安定しており、将来性があるようには見受けられない。面接した青年に、ずつといまの職場につとめるつもりか、将来の見込みがあるかどうかをたずねてみると、はっきりと将来の見込みがあると答えた者は、男子九名中僅かに二名で、他は「まあ何とかなるでしょう」とか、「たいして見込みがなさそうだがほかにいいところがないから、仕方ありません」とか、さらに「将来が不安です」と語っていた。とくに、官公庁や比較的大きな企業に勤めている青年が、「中卒や高校卒の学歴では、どんなに努力してみても、係長ぐらいにしか昇進できないから、将来に大きな希望は見出せない」というふうに語ったのが、注目された。

女子青年七名中、「結婚まで勤めて、結婚したらやめたい」が五名、「結婚後も勤めをつづきたい」と考えている者が二名あった。これも最近の農村の女子青年の一般的傾向とほぼ合致していると見る事ができよう。

ところで、とくに興味ある問題は、農家の長男で現在勤めている青年に帰農意志があるかどうかである。三十七年二月現在で、八田の農家の長男で、家業以外の定職についている青年が十一名あった。家の所有耕地は、最少二・五反から最大一町三反で、平均約九反である。これらの青年に、将来両親が農業をやれなくなったときにどうするつもりかと、帰農意志の有無を調査したら、表二〇の結果が出た。帰農するつもりだと答えたのは、中学を出て金沢の金網会

表20 農家の長男で現在勤めている者の帰農意志の有無

父母が農業ができなくなったときに、どうするつもりか	
(イ) 自分がつとめをやめて帰農する	1
(ロ) 自分はつとめをつづけて、農業は妻にやらせる	0
(ハ) 田をへらして、つとめの片手間にできるようにする	5
(ニ) 適当な時期に田畑をうって離農する	1
Z その他	1
X 無 答	3
計	11

社で働いている一七才のS青年（父Ⅱ四八才、母Ⅱ四五才が健在で、一町二反の水田を経営している）一名、また適当な時期に田畑を売って離農すると答えたのは、高校を出て銀行員をしている二二才のO青年（所有面積一町一反を父Ⅱ五六才と母Ⅱ五三才が耕作している）だけで、他はいずれも、田をへらして勤めの片手間にできるようにすると回答した。これらの青年の農家は、将米両親が農業ができなくなった時には、いわゆる「日曜農家」に変貌していくものと思われる。（一名の「その他」は、「田畑は三反しかありませんので、土曜、日曜や休日を利用して農業をやっていくつもりです」との答であったから、これも「日曜農家」の部類に属するであろう）全国統計によると、わが国の農家戸数はすでに減少しはじめているが、将来八田でも農家が次第に減っていくことが、この調査結果からも推定することができよう。

(4) 最後に、職場の労働組合の有無と加入状況は、第二一表のとおりである。男子の職場の半数以上（五五％）に組合があつて、八田の青年の加入状況も良好であるが、女子の職場に組合がないものが多いのは、いうまでもなく個人経営の商店などが多いためである。

青年労働者の学習上、職場の労働組合がきわめて重要な位置と役割をもっているが、八田の青年が勤めている職場の労働組合の活動状況までは立ち入って調査することができなかった。ただ質問紙による全数調査と、約四分の一の抽出

面接調査の結果を総合的に判断すると、職場の組合の活動が概して低調なためか、八田の青年のなかには職場組合内のサークルで活潑な学習活動を行っていると思われるものは、ほとんど見当らなかった。

それに反して、面接調査の際に、I製作所に工員として勤めているある青年が、「職場の組合が総評系の第一組合と全労系の第二組合とに分裂して、反目、抗争をつづけているため、職場の雰囲気が非常に重苦しく、わずらわしい。第二組合に所属した方が将来の昇進のために有利なようであるが、自分は第一組合にふみとどまっている」と打明けてくれたのが、印象的であった。しかし、青年労働者の学習に焦点を合せた最近のこの地方の労働組合の問題点についての調査は、別の機会にゆずることにしたい。

(四) 通勤青年の教育要求と学習課題

以上は、八田の通勤青年の職場の労働条件についての概括的な調査の結果であるが、おおよそ以上のような諸条件のなかで日々の労働生活をすごしている青年たちは、どのような学習意欲を持ち、どの程度学習活動をおこなっているであろうか。

まずその前提として、八田の通勤青年の学歴を調べてみよう。最初に報告しておいたように、ここ二、三年は八田においても高校進学者がかなり増加してきているが、それ以前は進学者がきわめて少なかったために、現在の在村通勤青年は第二二表のように、男女合計で四分の三までが中学卒で、高校卒は五分の一にもみえない。また、学校を出てからすぐに現在の職場に就職した者は、男子三三名中一五名で、他の一八名が学校(中学)を出てから短いもので半年後、

表21 職場の労働組合の有無と加入状況

	あ　　る		ない	わから な　い	無答	計
	入って い　る	入って い　ない				
男 { 数 (%)	15 (46)	3 (9)	13 (39)	1 (3)	1 (3)	33 (100)
女 { 数 (%)	6 (19)	3 (10)	18 (58)	2 (6)	2 (6)	31 (100)
計 { 数 (%)	21 (32)	6 (10)	31 (48)	3 (5)	3 (5)	64 (100)

表22 通 勤 青 年 の 学 歴

	中学卒	高校 中退	高校卒	大学卒	無答	計
男 { 数 (%)	22 (67)	(1) (3)	8 (24)	0 (0)	(2) (6)	33 (100)
女 { 数 (%)	26 (84)	(1) (3)	3 (10)	0 (0)	(1) (3)	31 (100)
計 { 数 (%)	48 (75)	(2) (3)	11 (17)	0 (0)	(3) (5)	64 (100)

長いものになると七年後に現在の職場に勤めるようになったと回答しているところから判断すると、現在の八田の通勤青年のなかには、中学を出て最初のうちは家の農業に従事していたが、その後好景気のために雇用が増大するにつれて、次第に離農して通勤青年になった者が約半数（上記の一八名中には、最初から勤めてその後職場をかえた者が若干含まれている）いることが推定される。女子の場合は、いっそうこうした傾向が顕著で、学校卒業後すぐに現在の職場に勤めた者は九名で、他の二二名は卒業後一定の期間を経てから勤めたことになっている。

つぎに、学校卒業後現在にいたるまでの、勤労青年のための教育機関への参加状況を調べてみると、第二三表の示すとおり、男女とも青年学級が第一

位を占め、女子の各種学校（洋裁学校、編物学校、料理学校など）がそれについているが、他の教育機関はあまり利用されていない。八田は金沢に近接しているにもかかわらず、高校の定時制が男女合せて一名、通信教育が女子二名にすぎないのは、高校の定時制や通信教育がこの地方では勤労青年のための後期中学教育機関としてあまり普及していないことを物語っている。

かつて企業内訓練所で職業教育を受けたことのある者が、男子に三名ある。

機 関 へ の 参 加 状 況

公職訓練所	共業所	企内職業訓練所	業業所	経営伝習農場	社会通信教育	その他	無答	計
0 (0)	3 (9)	1 (3)	0 (0)	3 (9)	3 (9)	33 (100)		
0 (0)	0 (0)	0 (0)	1 (3)	1 (3)	7 (23)	31 (100)		
0 (0)	3 (5)	2 (3)	1 (2)	4 (6)	10 (16)	64 (100)		

周知のように、近年技術革新の進行にともなつて、多くの大企業において、経営の体質改善を遂行していくための管理者層の教育ばかりではなく、中・下級職制養成のための企業内教育が盛んになっているが、この地方には整備された企業内訓練所をもっているものはきわめて少い。上の調査結果からみても、農業青年の場合と同様に、通勤青年にとつても、これまで青年学級（実際には部落青年団の文化部の事業として運営されてきたものが多い）が主要な学習の場であつたことは明らかである。もちろん、青年学級が農業青年はいざ知らず、通勤青年のためにどの程度学習効果をあげてきたかはきわめて疑わしいように思われる。少数の通勤青年の面接調査の結果から推定すると、青年学級に参加したと回答した通勤青年でも、比較的眞面目に出席した者は少く、また学習の成果としても、せいぜい「体育が楽しかった」とか、「男子青年と意見の交換ができて、お互いの理解を深めることができた」とかの程度にとどまっている。通勤青年の青年学級に対するこのような評価は、すでに報告しておいたように、農業青年がいずれも、「青年学級で農業の勉強ができてためになった」と高く評価しているのと対照的であるが、このことは、かつての農村の青年学級が通勤青年の教育要求をあまり満たしえなかったことを物語っていないであらうか。

少数の女子通勤青年（被面接者の過半数は仕事に忙しくてあまり出席できなかったとか、あるいは最初から参加しなかったと回答した）が、青年学級で「お花や手芸の勉強ができてためになった」とか、「人前で自分の意見が述べられるようになった」と評価しているのも、女子の青年学級にたいする一般的な見方と合致しているといえよう。

表 23 通 勤 青 年 の 教 育

	なし	高 校			青年 学級	各種 学校
		定時制	別科	通信 教育		
男 { 数 (%)	6 (18)	1 (3)	0 (0)	0 (0)	19 (58)	4 (12)
女 { 数 (%)	10 (32)	0 (0)	1 (3)	2 (6)	15 (48)	13 (42)
計 { 数 (%)	16 (25)	1 (2)	1 (2)	2 (3)	34 (53)	17 (13)

さきに述べておいたように、かつては一部の通勤青年に利用され、多少の教育的機能をもっていた八田の青年学級も、ここ一、二年ほとんど自然閉鎖の状態にある。そして、それに代って、森本の公民館に中央産業青年学級が開設されているが、八田の通勤青年でその学級に出席している者はほとんどいない。さらにまた、近年金沢市を中心にしていわゆる「職場青年学級」や「職域青年学級」が開設されはじめているが、今までのところその数はきわめて少く、八田の通勤青年でこの種の青年学級に在籍している者は一名も見当らない。そのうえまた、すでに報告しておいたように、労働組合の学習運動にほとんど見るべきものがなく、他面、企業内・外の職業技術教育の施設が整備、普及していないとすれば、現在八田の通勤青年は特記するに値する学習の施設と機会をほとんどもっていないと見なければならぬ。

しかしこのことは、決して八田の通勤青年が何らの学習意欲も教育要求ももち合せていないことを意味してはいないだろう。そこで、たとえ一部の少数の者にすぎないにせよ、八田の通勤青年がどのような教育要求をもっているかについての私どもの調査結果をここで報告しておこう。

八田の男子通勤青年の約四分の一にあたる九名に面接して、「このごろ自分から勉強したり、技術を身につけようとなさっていることがありますか」ときいてみると、「ある」と答えたのは二名（その内訳は、現在の職業上の技術の基礎としての数学、とくに三角法が一名と、他の一名も現在の職業技術としての鋳物法）で、他は「ない」と答えたが、さらにづいて「これから習いたいとか、身につけたいと思っておられることはありませんか」とたずねると、「ある」が七名、「ない」が二名とその比率は逆転して、九名中七名までが、職業技術としての自動車運転や製図、基礎学力としての英語、企業内（電々公社）の研修、関の入所試験を受験するための学力、などの学習を希望している。

女子青年七名の面接調査では、現在学習している者が四名、その内容はお花や編物などの技芸が三名で、職業技術（製図）が一名であったが、将来何か学習したいと希望している者も同じく四名で、その内容も和裁・洋裁・編物などの

技芸が主であったが、一名だけ「将来農家に嫁ぐことになるかも知れないので、農業を習ってみたい」と述べていたのが異例であった。

右のような少数の抽出調査の結果を一般化して、多くの通勤青年にあてはめて考えることは、もとよりさし控えねばならないが、以下に右の調査結果にたいする私たちの見解をつけ加えておきたい。

第一に、現在何らかの学習に心がけている者が男子通勤青年九名中わずかに二名にすぎない（女子の場合は七名中四名いるが、それはほとんど花嫁修業的なものに限られている）ことは、最近の通勤青年が農業青年にもまして、いわゆる大衆社会的状況とマス・コミ文化のなかで、仕事の余暇に個人、あるいは友人同志で娯楽や享楽を求める傾向が強く、かれらの学習意欲と学習活動が低調化していることを物語っているように思われる。（このことがたんに私たちの見解であるばかりではなく、八田の青年たちも自覚し、反省していることについては、後で改めて紹介することにした。）さきに報告しておいたように、最近中小企業の労働条件もかなり改善されて、労働時間は平均一日八時間に接近してきており、休日も週休または月二、三回のところが多くなってきた。しかし、仕事の余暇には、職場のサークル活動や地域青年団の会合をもったり、それに出席するよりは、むしろ家庭や街で休養と娯楽を楽しむ生活に満足しているいわゆる「状況埋没型」の青年が圧倒的に多くなっている。もちろん、こうした一般的風潮を、青年の怠慢だとか、かれらの「精神の空白」ないしは「頹廢」と見なして、青年だけを非難してはならないであろう。これは、おとなをも含めた最近の日本人全体の生活文化の問題として、さらには現代社会の根本問題として、別途に考察されなければならない問題である。

第二に、しかしながら、こうした最近の通勤青年のなかにも、日々の職業生活上の技術やその基礎学力の学習に励んでいる青年が少数ではあるが散見されること、さらに、現在施設や機会に恵まれないために学習をしてはいないが、これから学習したいという要求をもっている青年が数多くいるという事実に注目しなければならない。

改めて論ずるまでもなく、わが国は労働青年の教育要求にこたえるための教育機関や教育施設の面では、欧米の先進国に比較してかなりたちおくれている。労働青年のための正規の後期中等教育機関として発足した定時制高校は、教育行財政の貧困、教育内容上の問題、雇用条件などの多くの隘路のために、大衆的な教育機関として普及するまでには伸びていないし、またこれまで労働青年のための中心的な教育機関としての位置を占めてきた青年学級も労働青年（ここでは農業青年はしばらく論外におく）の教育要求に配慮し、それを満しうるように計画、運営されているものはきわめて少い現状である。さきに報告しておいたように、今日官公庁や大企業で働いている労働青年のなかには、学歴による職階制の力べが前途に立ちはだかっている現実に直面して、今更のようにせめて高校程度の教育を受けておけばよかったと後悔して、「働きながら学ぶ」ことによって、正規の学歴を獲得したいと望んでいる青年も少くはないが、今日わが国においては、高等学校や大学の門戸は労働青年にあまり広く解放されているとはいえない。私たちは今回のささやかな調査を通して、労働青年教育の施策と制度を国民教育の全体系のなかで根本的に検討して、労働青年の教育権を保証し、拡充するために、労働青年のための後期中等教育機関を面的に整備充実することと、さらに能力をもった一部の労働青年のために大学の門戸をも解放する必要を痛感した。

第三に、男子通勤青年の教育要求が職業技術とその基礎学力に、女子のそれが花嫁修業的な技能に集中されていることは当然であるとはいえ、八田の青年たちの教育要求がほとんどそうした領域に限定されているところに、問題が残されてはいないであろうか。

もちろん、私たちの男女合せて一六名の限られた抽出面接調査によって、男女通勤青年一般の学習意欲と教育要求を十分に聞きだすことができたとは断定しがたいが、八田の通勤青年のなかには、かれらの教育要求（現に学習していることと、これから学習したいとのぞんでいること）として、今日の青年労働者がおかれている政治、経済的状况についての科学

的知識、すなわち政治・経済の学習をあげた者は一名も見当らなかった。「毎日仕事をしておられて、学校時代にもっと勉強しておけばよかったと思うようなことはありませんか」との問にたいして、数学、珠算、英語、簿記などのほかに、「社会的常識」と「社会問題」をあげた者が三名いたが、そうした反省をもっている青年からも、政治・経済についての社会科学的学习の必要をはっきり意識していると判断できるような意見を聞くことはできなかった。

右に述べた学習意欲と教育要求に関する話し合いだけではなく、他の事項についての話し合いの結果から総合的に判断すると、農業青年をも含めて八田の青年たちには、いわゆる「政治的無関心型」が圧倒的に多いようである。八田の青年の政治意識については、前回（第二次）に若干の調査を行ったが（『社会教育研究』第二号、七四―八一頁参照）、今回の面接調査でも二、三の補足的な質問を試みてみた。たとえば、「あなたの信頼する政治家（日本だけでなく世界の）

は誰ですか」の問にたいして、農業青年六名中五名が、「政治のことは分りません」とか、「誰がやっても同じでしょう」と前おきして回答をしぶり、（残りの一名は石川県選出の国会議員O氏を挙げた）、通勤青年では一六名中一三名までが同様に「分らない」、「別にいない」と答えた。（他の三名は、しいてあげるならばと断って、社会党のE氏、石川県選出のT参議院議員、農協関係の全国区参議院議員のY氏を挙げた。）女子青年ばかりではなく、「政治にあまり興味がなく、新聞は家庭欄（またはスポーツ欄）と三面記事しか読まないの……」と語った者が相当あったのが、印象的であった。

また、「憲法改正問題についてはどういふ御意見ですか」と話しかけてみたが、青年たちの意見を整理すると、第二四表の結果になる。最近わが国の最大の政治問題となっている憲法改正問題について、半数以上の青年がD・K（分らない）グループに属し、また賛否いずれかの意見を表明した青年にしても、「はっきりと理由は説明できない」と述べていることは、きわめて重視すべき問題ではなからうか。（憲法改正問題についての以上のような青年の無関心・無理解はこ

の問題についてのマス・コミの取扱方や、これまでの公営社会教育が政治学習をほとんど敬遠してきたことにもついていると考えら

表 24

憲法改正問題についての青年の意見

	賛 成 (理 由)	反 対 (理 由)	わ か ら い	計
農 業 青 年	2 { <ul style="list-style-type: none"> 理由をはっきりいえない 何となく賛成だ 	0	4	6
通勤青年 { 男	4 { <ul style="list-style-type: none"> 公然と軍備をもつべきだ 外交交渉にも武力が必要だ 社会福祉の徹底をのぞむ 理由はいえない 	2 理由をはっきり説明できない	3	9
女	1 理由の説明できない	1 平和を守りたい	5	7
計	7 (32%)	3 (14%)	12 (54%)	22

れるが、ここではこの問題を深く論及する余裕はない。)

いずれにしても、私たちは今回の調査において、最初に予想したように、八田の青年の大多数が大衆社会的状況とマス・コミ文化のなかで(八田は金沢の近郊に位置しているので、他の近郊都市と同様にその生活様式がかなり都市化されてきている)、日々の仕事と、その余暇におけるさやかな娯楽と享楽の追求におわれて、最近の激動する農村社会の現実に押し流されることなく、青年らしい新しい生き方を探求し、新しい知識と実践力をきたえあげていこうとする主体的・積極的な意欲があまり感じられないという印象を抑えることができなかった。通勤青年に限ってみても、今日の青年労働者がおかれている社会階級的立場を自覚し、そうした基本的立場に立って、かれらが当面している政治・経済的課題と主体的に取り組もうとする姿勢と意欲を、はっきりとつきとめることができなかった。

もちろん、青年労働者の大多数が上に述べたような意欲や要求を明確なものとしてもっていないとしても(私どもの調査が不十分だったために、そうした意欲や要求がかれらの意識の底にうごめいていても、それをはっきりと聞きだすことができなかったのかも知れない、ということも十分に考慮しなければならない)、そのことは、そうした基本的な課題を解決する

ための学習がかれらに不必要であることを意味してはいない。それどころか、客観的にみて幾多の課題に直面しているにもかかわらず、それを課題として意識していないところにこそ、かれらの教育上の問題がひそんでいるというべきであらう。

上に述べたような路線の青年労働者の学習運動は、今日のわが国においては、公教育としての社会教育にはほとんど期待できず、それとは別箇の組織論と運動論によらなければならないとも考えられる。しかし、最近農村にも通勤労働青年が急激にふえてきている現状からみて、公教育としての社会教育の領域においても、上述した通勤労働青年にとって基本的な学習課題を多少なりとも考慮しない限りは、かれらを公教育的な社会教育の場に惹きつけることは不可能であらう。

四、共通の学習課題と新しい学習集団の可能性

以上、私たちは農村青年（農業青年だけではなく通勤青年をも含めて）の主要な学習課題は、まずさしあたって、生産ないしは職業技術と、それに結びつく政治・経済の学習であるとの前提から出発して、このような学習課題を具体的に規定している地域や職場の諸条件を調査、分析して、八田の青年たちがそうした学習課題をどの程度かれらの教育要求として意識しているかを探ってみたが、いうまでもなく、以上の学習課題のほかに、八田の青年たちが同じ地域に居住している以上、職業のいかんを問わず共通にもっていると考えられる課題がある。すなわち、地域民主主義の確立にたつた問題をはじめ、さまざまな地域社会の課題がそれであって、そうした課題についての学習と実践的解決は、おとなや婦人層よりも、青年の革新的・創造的なエネルギーに期待される面がきわめて大きい。地域青年団やその内部の学習集団が今後もおその存在理由をもちうるとするならば、それは主として上のような共通の地域的課題について語り

合い、学習する場であり、さらにその学習の成果を実践運動にまで展開する組織であるところに、求められなければならないであろう。

以上のような仮説に立って、以下に、八田の青年の地域の諸問題についての関心の程度と、青年団の活動状況についての調査結果を報告しておきたい。

八田は今次の戦争直後のころ、当時の二〇代の青年たちが結束して村の農地改革や民主化運動に立ち上って、主導的な役割をはたした輝かしい歴史をもっている。しかし、一方では日本の民主主義運動が全体としていちじるしく停滞し、他面、日本の農業が歴史的転換期にさしかかって、農村としての八田も大きな転換を迫られている今日の時点において、八田の青年たちは地域の諸問題にたいして、はたしてどのような関心をいだいているであろうか。

農業青年の明日の八田の農業にたいする姿勢が、少数の者を除いて、概して消極的・日和見的であることは、すでに報告しておいたとおりであるが、通勤青年は農村としての八田をどう見ているであろうか。面接調査で、「この八田でも、若い人達は、あなたのように農業をやらないでつとめに出る人が多くなりましたが、農業がどちらかといえばすたれていく心配があるわけですが、どんなものでしょうか」との話しかけにたいする通勤青年の意見を整理してみると、男子九名中、森本の農業共済組合の家畜係長として勤めて、乳牛の指導をしている一九才のS君が、「政府に農業基本法を具体的に裏うちするような農業施策を力強く実施してもらって、八田の農業を新しく伸ばしていきたい」という趣旨のことを語って、積極的な関心を表明したほかは、「八田の農業もある程度機械化したが、米作りしかできないし、その上米価が安いので、八田の農業の将来は、あまり見込みがなさそうに思われる。したがって、今後農業をやめる青年がますますふえるだろう」という意見の者が四名（そのなかの一名は、「工場を誘致してもらって、将来工場地帯として発展していけばいいように思う」との意見をつけ加えた）、他の四名は、「あまり考えてみたこともないし、どうなるかわからな

表25 地域の問題にたいする青年の関心
(青年がムラや町のためにしな
ければならないことがあるか)

	あ	る	ない	計
農 業 青 年	2。村の古い秩序の改革		4	6
通勤青年	6。 <ul style="list-style-type: none"> ○道路をよくする—3 ○工場誘致—2 ○生活改善—1 		3	9
			5	7
計	10		12	22

い」と、ほとんど無関心な態度のようであった。

女子(七名)では、「このごろは農業だけでは食っていけないから、男は外へ働きにでて、農業はおもに主婦がやるようになるのもやむをえないだろう」との意見が四名(うち一名は、はっきりと、結婚したら家庭の事情によつては、つとめをやめて農業に従事してもよいとの考えを述べた)、八田の農業の将来にはあまり見込みがなさそうだが、時勢だからやむをえないだろう」が一名、残りの二名は「あまり考えてみたことがない」の無関心型であった。現在農業以外の他産業で働

いている通勤青年が、八田の農業の将来にあまり関心をよせていないのは、自然の成行ともいえそうだが、通勤青年ほとんどすべてが、将来の八田の農業に傍観的な態度をとっているように思われる。

さらに、農業青年と通勤青年の双方に、「戦後八田では、その当時の若い人々によつて農地改革やその他村をよくするための仕事がなされましたが、いまの青年の皆さんで、八田や森本のためにしなければならぬと考えておられることがありますか」との問にたいする回答は、第二五表のように要約することができる。すなわち、農業青年中二名が、「八田には今日なお「上層部」ないしは「権力者」が支配する旧い秩序が残っている」ことを指摘して、青年が団結してそうした封建的遺制を改革する運動を起さなければならぬとの意見を述べたのが注目されたが、他の四名からは、「そんなことは考えてみたことはないし、何も思いつかない」との消極的な意見しか引きだせなかった。

前者の意見の青年に、さらにその実現の方法や可能性の見通しについて意見

を求めると、二一才のM君は、「最近の村の青年、とりわけ勤め人の青年たちは、仕事のひまに、村の外で娯楽を求め青春を楽しもうとする傾向が強いようだ。……たしかに年寄りたちが批判しているように、いまの若い者には、村の問題についての関心がなさすぎる。もっとしっかりと自分をみつめると同時に、村の問題に関心をもって、村の改革と発展のために、団結して運動をおこなさなければいけないと思う。青年の純粋な気持で運動を伸ばしていくと、いろいろと改革できるんじゃないだろうか」と、きわめて積極的な見解を語ってくれたが、その反面、はたして今日の青年が、共通の目標に向って団結して運動を展開していけるかどうか、かなり懐疑的な面持でもあった。

後者の消極的な意見の青年にしても、村の問題に全く無関心でもなさそうだが、「もとは、農村の青年としてまともやりやすかったが、近ごろは勤め人がふえて、団結しにくくなったから、何をやるうとしても駄目だろう」という現状追隨的、アキラメ的な態度に落着いているように見受けられた。ただ一人だけ、「いまの青年は村や町のために働くよりは、まず青年としてしっかりした教養を身につけるように心がけるべきではなからうか」との意見を述べたのが注目された。

通勤青年の大多数がバスで通勤している関係上、男女あわせて五名までが「道路をよくしたい」との意見をもっているのはうなづけるが、「どういう方法で実現したらいいと思うか」と追及すると、「実現はむずかしいだろう」、「青年が率先して運動してみても、実現はおぼつかないだろう」との消極的・悲観的な態度に変わってしまった。青年団の組織と団結の力で自分たちの希望が実現できるまで運動をつづけていく、といったような主体的・積極的な態度はほとんど見受けられなかった。

また、二名の男子通勤青年が「工場誘致」に関心を示したが、それも、青年たちが共同して工場誘致について学習し、その利害得失を検討した上で、運動をくりひろげたいというほどの具体的・現実的な主張ではなく、時流にのった漠然

とした希望にすぎないように受けとられた。

さらに、「生活改善運動」を指摘したある男子青年にしても、「これまでもたびたび、冠婚葬祭の簡素化などの生活改善運動がすすめられたことがあるが、村の有力者から申合せを破る始末だから、今さら始めてみても……」という懐疑的な態度であった。

女子青年の村の問題についての意見や関心も、以上に述べてきた農業青年や男子通勤青年のそれと大体同様であったが、ただその中に、「いまごろの男子青年は意気地がなくて駄目です」と、「いまの若い人たちには、幼稚な考えしかもっていない人が多いように思われる」という、男子青年にたいするきびしい批判が含まれていたことは、男子青年の傾聴に値するであろう。

さて、八田の青年のあらまし以上のような村の問題についての関心と意見を要約すると、ほぼ次の結論がひき出せるように思われる。すなわち、八田の青年は、通勤青年ばかりではなく農業青年の大多数も、農村としての八田の将来に、現状追隨的、日和見的な態度をとっているが、かれらの中にも、S青年のように、八田の農業の近代化、農業構造の改善をしんけんに考えている農業青年や、またM青年やN青年のように、部落に残存するムラ状況（旧い秩序）に不満をいだいて、その克服を考慮している青年も、その数は多くはないにしても、見出すことができる。また、比較的傍觀的な態度の青年にしても、村の現状やめいめいの生活現実に対して満足しているわけではなく、それぞれ何らかの問題意識をいだき、不満をもっていることはいうまでもあるまい。とりわけ、「お互いに仕事と遊びに追われて、個人の生活だけに精一杯になっている」（多くの青年が語った言葉の要約）と、近ごろの生活態度を反省し、何とか打開しなければならぬと思いつながら、青年同志が互いに呼びかけ、語り合って、新しい学習運動と実践活動をおこそうとするほどの積極性もなく、何らかのキッカケを待望しているように見受けられる。

表26

青年団の加入状況（37年2月現在）

	現 在	も と	は 入	無 答	計
	入 っ て い る	入 っ て い た	じ め か ら 入 ら な か っ た		
農 業 青 年 { 男	12	3	0	0	15
女	1	2	0	0	3
通 勤 青 年 { 男	23	6	3	1	33
女	15	10	4	2	31
計 (%)	51(62%)	21(26%)	7(8%)	3	82 (100%)

ここで、八田の青年団の最近の状況の報告に移ろう。八田の青年が青年団をどう見ているか——青年団を必要視しているか、青年団の存在意義と目標をどう考えているか、これまでの組織と運動をどのように改革したらよいと考えているか——については、第二次調査でいちおうの世論調査を試みて、すでに報告しておいた（『社会教育研究』第二号、七〇—七二頁）ので、ここでは省略することにするが、第三次調査を実施した三十七年二月現在の八田の青年団の加入状況は、第二六表のとおりである。

すなわち、青年団に加入している者は、八二名（在村勤労青年総数二二六名の六四％にあたる）中の五一名、加入率は六二％で、他の八村の青年団と同様に、かつての網羅的な地域青年団の組織がすでにかなりくずれかけていることを示している。八田では、能登の農村のように、離村青年はさほどふえているわけではないが、最近、仕事が多忙（四名）、会合に出席しにくい（二名）、団の現状にたいする不満（一名）、友だちがやめたから（一名）、などの理由で脱退する者が多くなっている。また、最初から入らなかった者の理由は、仕事のついでで活動に参加できそうになかった（三名）、青年団の活動が気に入らな

った（二名）、友だちが入らなかった（二名）、などであった。

私たちは今回の調査で八田の青年団の歴史を調査することができなかったが、最近の活動は低調化の一途をたどっており、とくに学習活動で特記するに値するものは、ほとんど見当らなかった。現在の幹部と話合った時も、どのよう

な会合を計画してみても、集まる者があまりに少いために、継続的な活動がやりにくいという悩みを訴えていた。こうして最近の八田の青年団は、都市近郊農村であるために在村通勤青年が多い関係上、会員数は必ずしもあまり減少してはいないが、他の多くの農村のそれと同様に、祭礼や盆踊りの行事を共にするいわゆる「行事青年団」として、あるいは時々、の体育・レクリエーション活動によって、かろうじてその命脈を保っているにすぎないと見ることができよう。八田には地域青年団のほかに、この村に特有な「クラブ」と称するインフォーマルな集団がある。それは、近年では中学を卒業した二箇学年の男子青年が一つの単位となつて、メンバーの話し合いによって顧問や会合の場所をきめ、(ある有力なメンバーの家庭がえらばれて、その会員の姓をクラブの名前にしている)、かなりひんぱんに会合しているもので、昔の「若衆宿」の一つの遺制と見ることができる。

今回の調査によると、多い者は週に三、四回、比較的少い若でも週に一回程度クラブの宿を訪ねているようである。だが、その会合の内容は、ほとんど同年ごろの青年の娯楽、雑談に終始して、麻雀やテレビの共同視聴、「遊びや女」の話、村内のうわさ話、スポーツや新聞の三面記事などを中心とする世間話、さらに時々、の飲食(そのため、各クラブは一人当り年額七、八千円から一万円ぐらいの経費を使っている)が主になっていると報告されている。「仕事から帰って家にいてもつまらないから、クラブの宿へ行って、友だちといっしょにテレビを見たり、時々酒を飲んで雑談する」というのが、多くの青年のクラブについての報告であつた。

しかし、少数の青年は、「もっと真面目な話、たとえば農業問題や八田の将来のことなどを話題にしようとしても、相手にされないから、クラブはつまらない」、「ただ義理で入っているだけで、できたらやめたい。あんなつまらぬクラブよりは、もっとまじめな話し合いをしたり、勉強をするための会合の方が、よっぽどましだと思う」という、きびしい批判的な意見をうち明けてくれた。

八田の有力者のO氏は、「八田がこれまで一人の犯罪者も出さなかったのは、おもにクラブのお蔭だと思う」と語って、クラブが青少年の不良化防止に大きな役割を果たしてきたと高く評価している。たしかに、そうした一面を無視することはできないかも知れないが、単なる社交的・娯楽的なクラブの存在が、青年団の学習活動を阻害している他の反面もまた見逃すことができないように思われる。もちろん、「クラブで時々青年団のことについての話し合いが交されるから、クラブがあるために、青年団活動がしやすいように思う」と、ある青年が述べていたように、上に述べたようなインフォーマルなクラブを、フォーマルな青年団の土台ないしは下部構造として利用したり、さらにクラブそのものの機能を単なる娯楽的なものから教育的なもの——もちろん青年の自主的な学習集団として——へ転換する試みも考えられるが、この点については、今後の実験的研究にまづことにしたい。いずれにしても、少くとも今日までのところでは、八田の青年のクラブが、村の生産活動や政治に関する学習と実践運動に、さほど積極的な役割を果たしていないと断定できるように思う。

ここで、再び地域青年団の問題に立ちかえることにしよう。八田においてもかつての地域青年団の組織がくずれかけて、その活動がいちじるしく停滞しているのは、八田の青年自身も認めているように、農業青年も通勤青年ともに日々の仕事や娯楽の追求に忙しく、個人の生活に精一杯になって、集団的な活動がやりにくくなったためではあるが、より深くその原因を追求してみると、それはもっと大きな農村社会の変貌そのものに根ざしていると考えられる。すなわち、かつての農村の青年団は、福尾武彦氏も指摘しているように（日本社会教育学会編『農村の変貌と青年の学習』、三七—五九頁参照）、伝統的な村の構造と秩序のなかで、おとなの生活と村落生活の慣行を青年に伝習させる機能と、娯楽の少ない農村の生活のなかで青年たちが集って娯楽と慰安を求める役割を果たしていたが、最近いわゆる「下宿型」の通勤青年が増えて、部落の問題にたいする関心が次第に薄れると同時に、他面では、さまざまな商業資本が農村にも安易に娯

樂を提供してくれるようになってきている近年の農村社会においては、かつてもっていたその伝統的な機能と存在理由をほとんど喪失しかけているにもかかわらず、それにとって代るべき地域を基盤とする新しい青年集団の成立根拠とその運動の目標を、青年たちがまだはっきりと意識し、自覚するまでには至っていないのではなからうか。

農業青年と労働青年が政治・経済的に密接な利害関係によって結ばれている——いわゆる労農提携の理論と運動はこの事実に立脚している——ことを意識するためには、ある程度の社会科学の学習が必要であるから、必ずしも容易ではないかも知れない。だがしかし、今日の激動する日本社会と、農村社会の目まぐるしい現実のなかで、それに戸迷いし押し流されるのではなく、かえって主体的にそれと取り組んで、青年の新しい生き方を探求し、そのために新しい知識と実践力をきたえ上げてゆくことは、職業のいかんを問わず、農業青年にも通勤青年にも共通に課せられている課題ではないであらうか。たとえかつての「よんど農村社会のなげきやぐち」を語り合い、封建的な抑圧からの人間性の解放を求め合った農村青年の学習集団の存在理由がかなりうすれてきているとしても、それに代って、人間らしく生きたいという青年の切実な人間的な願いから、お互いの生活を語り合い、村の将来や、さては日本や世界の問題を論じあう新しい学習集団は、今日ますます必要になっていっているのではなからうか。

もっと具体的にいおう。この報告でたびたび指摘しておいたように、今日の八田は、日本農業の歴史的転換期に際会して、八田の農業の近代化とどのように取り組み、それをどのような方向に推進したらよいかという問題をはじめとして、まだ残存する古い部落の秩序の改革、その他いくたの問題をかかえている。私たちの調査では、方法、手続の不備もあって、そうした問題に積極的な関心と意欲をもっている青年を数多く見出すことはできなかったが、すでに報告しておいたように、少数の青年は、はっきりとそのような問題を意識し、それと取り組もうという学習意欲と積極的な姿勢をもっていることを確信することができた。

そして、これら少数の青年を中核体として、青年の新しい学習集団を組織し、次第にまだ明確な問題意識と学習意欲をもっていない青年をも一人ずつ仲間に入れて、その学習運動を伸ばすことによって、それを一面では八田の農業の近代化運動と、他面では八田の青年がおかれているムラ状況とマス状況を克服する地域民主主義の運動にまで発展させる可能性は、八田の青年のなかに豊かに残されている。——これが私たちの今回の青年調査の総括的な結論である。

このような新しい学習集団を形成し、発展させていくためには、これまでの地域青年団の組織によりかかるよりは、むしろ少数の青年の学習集団の組織と、その拡大・大衆化の路線が望ましいように考えられる。しかし、今回の調査では、今日の八田の青年のなかで、さしあたってどのような学習問題を中心として新しい学習集団を組織したらよいか、またどのような方法によってその学習を計画的・継続的に伸ばしていったらよいかについて、明確な見通しをもちうるまでには至らなかった。

私たちは今後さらに八田の青年との接触をたち、語り合い、その学習運動を援助する実践的な調査活動のなかで、以上の諸問題を実験的に研究していきたいと考えている。

あ　と　が　き

急激に変貌していく農村において、その社会教育の課題を探求しようとして、八田村の調査をはじて満二カ年、その中間報告として昭和三十七年三月社会教育研究第二号にこれを発表した。その内容は、八田が当面する社会教育上の問題が何であり、それがどのような社会的基盤につながっているかをあきらかにしようとした。そしてその基本的資料として八田における土地所有と経営面積の実態、兼業の進行状態等を調査して、農村としての八田の性格を把握し、そ

のような性格の村の生活の中で農民はどんな問題に直面しているか、その問題に対応する意識の実体を究明したいと考えた。その対象として農業経営主、主婦および青年とわけて、それぞれの対象について、どのような独自の問題があるか、その問題に対して、どのような意識が対応しているかをあきらかにしようとした。それとともに三者に共通する問題として、政治意識とマス・コミの調査をした。その結果は前述の中間発表となったのであるが、それに引続いて今回は、前回の基礎調査に基づいて、八田の社会教育の課題を探索しようとしたのである。（社会教育研究第二卷中野委員報告）

さきの中間報告のはしがきでも述べたごとく八田はべつに著しい特色のある村ではないから、調査の結論として出たものも、特に著しい独自のものはない。むしろ日本の農村が一般に直面する共通問題が多いことは、はじめに予想した通りである。

たとえば兼業化は前回の調査よりさらに急速に進んでおり、これら兼業農家の農業に対する改革意欲はあまり強いとはいえず、さりとて農地を売却して離農するには、雇傭先が不安定でありかつ低賃金であるという悩みがある。専業農家は、耕地を拡張するにしても、機械化を進めるにしても先立つものは資金であり低利資金の導入である。これがなかなか簡単にいかぬばかりか、さきに断行した河北潟埋立の借金の返済にも重圧を感じているという状態である。

さらに積極的に水稻単作から成長農産物へと構造改善を進めようとしても、農産物価格保障でもない以上、現在のところ米作ほど安全で、労働報酬のよいものがないから八田の農民は中々ほかのことに飛びついていけないばかりでなく八田は、そういう土地条件にも恵まれていない。

そして以上の問題点の多くは、八田単独においては如何ともできない問題で、政府の政策と大きな関連がある、したがって農村の現状を打開して、農業の近代化を図るために、まず必要なことは、農民のこのような立場を、しっかりと把握しそれを政治に反映させる必要があるが、この点についての農民の自覚は非常に低調であることはやはり全国的傾

向とあまり変らない。

前回の調査でもあきらかであるように、調査人員一六六名中旅行とお産を除いて、一〇〇%の投票率である、そしてその七七・七%が自民党を支持している。それならば、その自民党の政治に満足しているかといえ、わずかに二%、不満なものは三・一%で、満足はしないが、今の程度でも仕方ないというものが三八%、わからないというものが二六%もいるのである。きわめて消極的なものを加えても、自民党を支持するものが四〇%に過ぎないのに、投票面では七七・七%となっていることは、いかに村民の政治意識が政治に正しく反映していないかがうかがわれる。今度の調査においても「政府や農林大臣は農民の立場を真剣になって考えていてくれているから、農業政策についてわれわれがあれこれと心配する必要はない」という考え方に對して、これを肯定したものが二〇人中一名に過ぎず、はっきり否定したものが七名であること（中野委員報告）をもつてしても、農民は自民党の農業政策を支持していないことがあきらかである。しかもこの農民の意向が政治に反映していないとすれば、どうすればこれを反映できるようにするかが社会教育の大きな課題でなければならない。中間発表でも述べたように、二六%のわからない層は政治に對しては、全く無関心か、あるいは政治知識を全く欠いているためなのかも知れない。もしそうであれば、このものいわぬ層の生活の中に深く入りその心情や願望のすみずみまで深く調査し、何がこの人々の問題であるかを引出すことが必要である。しかしこの分らない層の存在が今日の多数党にとって、かえって有利なことは、投票の結果が示している。したがって、彼等にとって、これ等を民主的に啓蒙し、この分らない層をなくするように努力することは不利であるゆえに、それをやろうとしないところに問題解決の困難さがある。

この農民の低調な政治意識を多数党政府の意に反して啓蒙することは、その地位を保障されていない公民館主事などにはきわめて困難な問題である。また革新政党のハネ上りの論議は到底農民の現状において受入れられないとすれば、農

民にとって、切実なこの問題点を啓蒙するには、せめて彼等の要求を、多数党を通じて実現し得るような線ぐらいまですすめることも最小限度要求されなければならない。しかしそれと平行して社会教育上の問題点は、たとい政府が相当革新的な農業構造の改善をはかるにしても、それが実現されるために最小限度、農村自体が、自らをあらかじめ教育しておかなければ、スムーズにその政策を進めたいものがある。

たとえば農業近代化のためには、農業経営の数量的把握の習慣もつけられねばならず、農業協同化の上における意識変革も必要である。この点農民自体も、現在の農民意識の状態では農業協同化などは相当困難であることに不安を感じていることは座談会の質問の中にもあらわれている。またこれら農民の低調な政治意識の下には、この村の二三の青年が指摘しているように、村内の上層部ないし権力者等の旧秩序より受ける圧迫感、それからくる現状追隨的アキラメ的態度。何をやっても駄目だろうという消極的引こみ思案的な態度が根強く潜在している。このカベを打破らない以上、青年団活動も、婦人会も、ただ、せいぜい、スポーツを楽しんだり映画を見たりお祭りをしたり酒を呑んだりするだけのものになるのは当然である。

しかしそれと彼等は何の不満も要求もないか、日常生活の中にも何の矛盾も感じていないかといえ、必ずしもそうでない。たゞそういう小さな不満や要求を組織するオルガナイザーがいない。(三島委員調査報告) さらにそれを高めて町村当局、県や国への政治的要求として組織化する指導者のないところに問題がある。

単なる語り語り、単なるぐちぐちの話し合いでは長続きもしないし、何ものも新しいものが生れてこない。共通の要求を掘り起し、矛盾を発見し、不満を結集し、問題解決の方向を見出し、たとえ身近の小事であっても、これを自力で解決することによって生ずる自信をもたなければ到底社会教育の課題解決はできないであろう。このエネルギーはどこかで生れておるであろうか。今回の調査の結果、経営主、主婦、青年にも、それぞれ、その萌芽を見出す

ことができたし、また各調査員によって、その解決の示唆も与えられている。しかしそれは全く願望をこめた示唆であつて、卒直に言えば、現状のままでは成長発展の可能性は少い。したがって本研究室においては、調査に際しての協力に対する感謝とアフター・サーヴィスを兼ねてこの課題解決に対し、いかに協力の体制を取っていくかということが今後の問題となってきたのである。

調査方法は、青年を対象とした全数基礎調査（質問紙法、資料参照）のほかは、経営主、主婦、青年のそれぞれから二〇名を抽出して選り抜く面接聞きとりによつた。

調査員は、教官六名、報告の執筆責任者は次のとおりである。

第一章 中野光

第二章 三島宗彦

第三章 神力甚一郎

あとがき 永守良治

調査のあゆみ、および資料 出雲路暢良

調査のあゆみ

第三次調査

三六・ 七・一九 調査委員会・第三次調査の基本方針を検討

二四 "

八・二二 森本町八田小学校において、森本町教育長

をはじめ諸関係者と調査担当者との懇談会
を行う。第一次第二次調査の結果を報告し
意見交換を行い第三次調査原案立案の参考
とした。

二八 調査委員会・石川県社会教育課長をまねき、

第一次第二次調査の結果をめぐって意見を
交換

九・二 調査委員会・第三次調査基本方針検討

一三 "

二〇 "

二七 "

第三次調査の担当を次の通り決定

青年 永守 良治

神力 甚一郎

主婦 新谷 賢太郎

経営主 三島 宗彦
中野 光
幸村 誠

一〇・二 調査委員会・神力案（青年）を検討

二七 "

一一・二 調査委員会・三島案（主婦）及び中野案
（経営主）を検討

六 "

一七 調査委員会・石川県社会教育課朝倉主事堀
井主事をまねき、石川県の婦人学級につい
て意見を交換

二四 調査委員会・神力案を再検討

一二・一 調査委員会・神力修正案を検討

八 "

一五 調査委員会・中野修正案を検討

二二 調査委員会・農山漁村文化協会常任理事浪
江虔氏を囲み意見交換

三七・一・九 調査委員会・神力修正案及び青年に関する
質問紙法による全数基礎調査原案を検討・

青年基礎調査票を確定し印刷に付す

- 第三次調査の対象は次の通り
経営主（年令別・経営耕地面積別構成）
- 一〇 調査委員会・中野修正案を再検討
 - 一九 調査委員会・調査の基本方針を再確認
 - 二五 調査委員会・プリテストについての打合せ及び神力第二次修正案の検討
 - 二・一 青年基礎調査票の配布及び回収の事務を八田公民館に依頼し調査票を渡す
 - 二 調査委員会・神力第二次修正案検討
 - 七 "
 - 二二 プリテストを実施し、同夜森本町深谷温泉石屋において調査委員会を開きプリテスト結果を検討
 - 二三 調査委員会・プリテスト結果を検討
 - 二七 調査委員会・各担当者よりプリテスト結果に基づく修正を報告
 - 三・一〇 調査委員会・調査票の最終検討
 - 一一 "
 - 一五 調査票を印刷に付す
 - 一七 第三次調査の具体的実施方法について現地打合せ
 - 一七 第三次調査を実施
 - 一八 "

計	2.0ha以上	1.5ha～2.0ha	1.0ha～1.5ha	1.0ha未満	積面
					令年
9	2	1	5	1	30才代
7	0	2	4	1	40才代
4	1	2	0	1	50才代
20	3	5	9	3	計

主婦（年令別・経営耕地面積別・専業別構成）

計	1.5ha以上	1.0ha～1.5ha	1.0ha未満	面積 令年
5	2	2	1	20才代
9	3	4	2	30才代
6	3	2	1	40才代
20	8	8	4	計

第二種兼業農家

5

第一種兼業農家

13

専業農家

2

勤労青年（男女別・年令別）

計	25才	24才	23才	22才	21才	20才	19才	18才	17才	
9	1	0	1	1	1	1	1	2	1	男
7	0	0	0	0	3	1	2	1	0	女
16	1	0	1	1	4	2	3	3	1	計

農業青年（男のみ・年令別・経営耕地地面積別）

計	25才	24才	23才	22才	21才	20才	今年 積面
1	0	0	0	0	1	0	0.7ha ～1.0ha
2	0	1	0	0	1	0	1.0ha ～1.5ha
3	1	0	1	0	0	1	1.5ha以上
6	1	1	1	0	2	1	計

三・二五 社会教育研究第二号発行（当調査の第一回報告所載）

三・三〇 調査委員会・第三次調査の事後処理について打合せ。報告書の執筆担当を次の通り決

定

経営主 中野 光

主婦 三島 宗彦
青年 神力 甚一郎

あとがき 永守 良治

五・一二 調査委員会・経営主調査報告担当の中野よりその報告執筆の方針及び中間報告ありこれを検討

五・三一 調査委員会・主婦調査報告担当の三島、青年調査報告担当の神力よりそれぞれその執筆方針及び中間報告ありこれを検討

六・五 調査委員会・神力より中間報告ありこれを検討

六・二八 神力補充調査のため八田へ

一〇・三 調査委員会・名古屋大学での社会教育学会で当調査について発表することに決定

一〇・一五 名古屋大学における社会教育学会で当調査について研究発表を行う

発表者

経営主について

中野 光

青年・主婦について

出雲路 暢良

一〇・一八 調査委員会

調査の結果にもとづき、八田において実験講座を開設し、社会教育の学習理論の研究に資することを決定

一一・七

定例研究員会・席上八田実験講座の構想を發表し研究全員の協力の下に推進することとなる

三〇 定例研究員会

八田講座の基本構想を討議

一二・二

新谷、出雲路八田へ出張八田講座につき現地の意向をきき、開設についての相互協力を約す

一二・二一

調査委員会・八田において、八田の社会教育を語る会、という形で調査報告会を行い、八田講座の最初の布石とすることに決定

一四

定例研究員会・主事より八田講座の基本構想を説明検討す

一六

八田農協において、八田における社会教育を語る会、を開き調査の報告を行うとともに八田講座の最初の布石とした。大学より八名出席、地元の参加者約四〇名。活発に意見が交換された。

二四 新谷主事八田公民館長横川氏と打合せ

三一 調査委員会・八田講座具体案について打合せ担当を次の通り決定

経営主 中野 光

主 婦 出雲路 暢良
新谷 賢太郎

三島 宗彦
沢田 忠治

青年 神力 甚一郎
永守 良治

三八・一・六 神力、八田のクラブへ行き青年と懇談

九 新谷・沢田、八田の婦人代表と懇談

一二 八田講座婦人担当者打合せ会

一三 八田婦人講座・新谷、三島、沢田出席、今後の方針を中心に座談

一八 八田講座婦人担当者打合せ会

二一 以降豪雪のため八田との交通途絶、冬期間における講座の開設が不可能となる。

三・一四 八田経営主講座及び主婦講座現地打合せ

二四 八田経営主講座第一回、農業構造改善事業をめぐって、石川県農事試験場所中川竜一

二七 八田主婦講座第一回

婦人を取りまく諸問題、三島宗彦

以上

本調査担当者氏名

金沢大学教育学部教授

永
守
良
治

同
同
同

神
力
甚
一
郎

同
同
同

新谷賢太郎

同
法文学部助教授

三島宗彦

同
教育学部講師

中野光

同
法文学部助手

幸村誠

同
教育学部同

出雲路暢良

同
社会教育研究室員

室谷愛子

同
同

橋本澄子

第三次調査

調査票及び集計

社会教育調査 (第三次)

回答者氏名

昭和 37 年 2 月

金沢大学社会教育研究室

この調査について、青年のみなさんへのお願い。

この調査は、これからどうしたら、青年のみなさんがそれぞれの町や村や職場で、大事なことをたのしく勉強することができるようになるだろうかというみちすじをみつめるためにする基礎調査です。どうか協力くださいますようお願いいたします。

なお、いろいろおつしやりにくいこともあるかもしれませんが、この調査のまとめについては、個人の名は絶対に出しませんから、ありのまますかいてください。みなさんからいただきましたお答えは、金沢大学社会教育研究室で学問的見地に立つて分析いたします。出来るだけ正確なものにしたいと思いますので、下記の注意がきをよくお読みくださつたうえで回答してください。

※ 回答記入上の注意

(1) 他の人に相談しないで自分の考えだけでかいてください。

(2) 答えの○印は番号につけてください。 [例 1. 野菜 ② 養期 3. 養豚 4. 肥育牛 5. 酪農
6. その他 ()]

(3) 答え方は、○印をつけるものだけでなく、[どんなことですか ()] とか、[いくらくらいでしたか ()] というようなものがありますから、このような質問の答えは () の中へ具体的に書きこんでください。もしわががせますぎるときは余白を利用してください。

a あなたの家族についておたずねします。今いつしよに住んでおいでになる方に○をつけて年令と職業をかいてください。(兄弟姉妹などについては空欄にしておきましたから長兄、次兄、などかいてください)

兄 弟 姉 妹					そ の 他									
	祖 父	祖 母	父	母										
年 令														
職 業														

b あなたの家で作つていられる田は何反ですか。あてはまるところに○をつけてください。

1. 0 反～2 反99

2. 3 反～4 反99

3. 5 反～6 反99

4. 7 反～9 反99

5. 1 町～1 町4 反99

6. 1 町5 反～1 町9 反99

7. 2 町 以上

c あなたのことについておしらせください。

名 前	性 別	生 年 月 日	満年齢	両親の何(男)(女)か	最 終 学 歴
	男 女	昭和 年 月 日	才		(卒業、中退、在学)

d あなたのおもな職業は、次のうちどれですか。○をつけてください。

〔注意 農業のかたわら他の仕事をされる方は 1. 農業に○印をつけてください。〕

1. 農業 2. 勤め人 3. 家事 4. 学生 5. 無職

これからあとの質問については、上のdの質問で

- 1 農 業 ———— に○をつけられた方は **A** 欄と **C** 欄の質問に答えてください。
- 2 勤め人 ———— に○をつけられた方は **B** 欄と **C** 欄の質問に答えて下さい。
- 3 家 事 }
4 学 生 } ———— に○をつけられた方は **C** 欄の質問に答えてください。
5 無 職 }

〔dの質問で 1. 農 業 に○をつけた方だけかいてください。〕

あなたの家の農業のことについておたずねします。

(1) あなたの家で、現在、米作りのほかに力をいれてやっていることがありますか。

0. なし 1. 野菜 2. 養鶏 3. 養豚 4. 肥育牛 5. 酪農 6. その他 ()

(2) あなたの家で、将来、米作りのほかに力をいれてやりたいと考えたり計画したりしているものがありますか。

0. なし 1. 野菜 2. 養鶏 3. 養豚 4. 肥育牛 5. 酪農 6. その他 ()

(3) あなたの家では、農業簿記をつけておられますか。つけておられたら、どなたがつけていられますか。

1. つけている → イ あなた自身 ロ 父 ハ 兄 ニ その他 ()
2. つけていない

あなたのことについておたずねします。

(4) あなたは、家の農業経営について、どの程度まかされていますか。

1. すべて自分がやっている。 2. 一部まかされている。 3. すべてさしずをうけてやっている。

(5) あなたは、去年一年間に、農業以外にどんな仕事をなさいましたか。

1. はたらきに行かれたところに○をつけてください。

イ 工場 ロ 商店 ハ 入夫仕事 ニ お手伝い ホ 大工や左官の仕事 ヘ その他

2. その仕事の内容を
かいて下さい。

(6) では、その農業以外の仕事を、去年のどの月になさったのですか。10日以上なさった月を○でかこんでください。

1月 2月 3月 4月 5月 6月 7月 8月 9月 10月 11月 12月

(7) その農業以外の仕事で、去年一年間のあなたの収入は、全部で大体いくらくらいでしたか。

約 円

(8) あなたは、その農業以外でえられた金を、どのようにおつかいになりましたか。一つだけ丸んで○をつけてください。

1. ほとんど全部家計に入れている 2. 一部〔約 割〕家計に入れている。
3. ほとんど全部自分の小使いにしたり、自分の貯金にしたりしている。

B

〔dの質問で 2. 勤め人 に○をつけた方だけかいてください。〕

あなたの勤め先のことについておたずねします。

(1) あなたの勤め先は、次の三つのうちどれにあたりますか。○をつけてください。

1. 会社 2. 個人の経営 3. 官公庁・学校

(2) 勤め先の名称と、所在地をおしらせ下さい。

名 称→

所在地→

(3) 〔会社、個人の経営におつとめの方のみお答え下さい。〕

そこは何をしていますか。(たとえば、機械製造、自動車修理、食品販売、大工、クリーニング店、などかいてください)

(4) あなたの勤め先の資本金はいくらですか。

1.

約 億

万円

2. しらない

(5) 〔会社、個人の経営、におつとめの方のみお答え下さい。〕

あなたの勤め先の従事員は全部で何名くらいですか

約

名

(6) あなたの勤め先には労働組合がありますか。

1. ある

2. ない

3. わからない

職場でのあなたのことについておたずねします。

(7) いまの勤め先へ就職なさったのはいつですか。

1. 学校卒業後すぐに

2. 学校を卒業してから () 年目に

(8) 職場でのあなたの仕事はどんな仕事ですか。なるべくくわしくかいてください。

(9) 職場でのあなたの身分は、次のうちのどれにあたりますか。

1. 木採用 2. 臨時採用 (一年以上続いで) 3. 臨時採用 (一年未満) 4. 季節雇い 5. 見習

6. はつきりしない 7. その他 (くわしくかいてください)

(10) 一日の平均勤務時間は就業もふくめてどれくらいになりますか。

1. 8時間未満

2. 8時間

3. 8時間～9時間

4. 9時間～10時間

5. 10時間～11時間

6. 11時間～12時間

7. 12時間以上

(11) 昨年12月の給料は残業手当その他をふくめて手取りいくらでしたか。またボーナスは手取りいくらでしたか。

給 料

{

1. 4,999円未満

2. 5,000～7,499円

3. 7,500～9,999円

4. 10,000～12,499円

5. 12,500円～14,999円

6. 15,000円～17,499円

7. 17,500～19,999円

8. 20,000円以上

ボ ー ナ ス

円

(12) あなたは、自分の給料をどのようにつかつておられますか。

1. はほとんど全部家計に入れている。 2. 一部分〔約 割〕家計に入れている。

3. はほとんど全部自分の小使にしたり、自分の貯金にしたりしている。

(13) あなたのお勤め先の休日はどのようになっていますか。

1. 週1日

2. 月に2～3回

3. きまつていない

4. その他〔 〕

(14) 〔労働組合のあるところにおつとめの方のみお答えください。〕

あなたは、労働組合に入つていらつしやいますか。

1. 入っている。 →

組合費は月いくらですか。

月

円

2. 入っていない。 3. 入れてくれない。

(15) あなたは、何を利用して通勤していらつしやいますか。

1. バス

2. 自転車

3. オートバイ

4. 汽車

5. 徒歩

6. その他〔 〕



【全部の人に】

(1) あなたは、学校卒業後、次のようなところで勉強されたことがありますか、あつたら○をつけてください。

0. なし 1. 高等学校定時制 2. 高等学校別科 3. 高等学校通信教育 4. 青年学校
5. 洋成学校、稲物学校、料理学校など 6. 各種学校（自動車学校、理容学校、経理学校、タイピスト学校など）
7. 公共職業訓練所 8. 会社の職業訓練所 9. 経営伝習農場 10. 産業開発青年隊（農村建設青年隊）
11. 社会通信講座（ラジオ講座など） 12. その他（ ）

(2) あなたは、現在青年団に入っていますか。またかつて入っていたことがありますか。

1. 現在入っている 2. もとは入っていた 3. はじめから入らなかった

(3) 〔(2)で 1. 現在入っている と答えた方におたずねします。〕

いつ入りましたか。

昭和 年 月

(4) 〔(2)で 2. もとに入っていた と答えた方におたずねします。〕

1. いつやめられましたか→

年前

2. やめられた理由は何ですか→

(5) 〔(2)で 3. はじめから入らなかった と答えた方におたずねします。〕

青年団に入らなかった理由は何か→

(6) あなたは、青産研、農事研究会、職場のサークル、その他のグループなどに入っていますか。またかつて入っていたことがありますか。

1. 現在入っている 2. もとは入っていた 3. 入ったことはない

(7) 〔(6)で 1. 現在入っている と答えた方におたずねします。〕

それは、どんな会あるいはグループですか。そこではどんなことをしていますか。

いつ入りましたか→

年前

(8) あなたは、クラブに入っていますか。入っていられましたらあなたのクラブは何クラブかおしらせください。

1. 入っている→

クラブ

2. 入っていない

(9) 〔(8)で入っていると答えた方におたずねします。〕

あなたはどの程度クラブへ行きますか。

1. ほとんど毎日 2. 週に1, 2回 3. 月に1, 2回 4. 盆と正月くらい 5. ほとんど行かない。

調査の質問はこれで終わりましたが、ごめんどうでしょうか、念のためもう一度よみかえてみてください。

ご協力本当にありがとうございました。心からお礼申し上げます。

< 共 通 問 題 >

(1962. 3)

- (1) 政府や農林大臣は、農民の立場を真剣になって考えてくれているから、農業政策についてわれわれがあれこれと心配する必要はない。

そうだ。いちがいにはいえない。ちがう。わからない。

その他（ ）。

- (2) 町会議員や国会議員は、選挙によって選ばれているのだから、そういう人達のやることにとかく文句を云うべきではない。

そうだ。いちがいにはいえない。ちがう。わからない。

その他（ ）。

- (3) いまの憲法はアメリカからおしつけられたのだから改正すべきだ。

そうだ。いちがいにはいえない。ちがう。わからない。

その他（ ）。

- (4) 米の値段は政府が決める立前になっているのだから、農民がむしろ旗を立てて要求運動するのはよくない。

そうだ。いちがいにはいえない。ちがう。わからない。

その他（ ）。

- (5) 百姓は食うだけは困らないし、誰にも気がねしなくてもいいから、サラリーマンにくらべていい職業だ。

そうだ。いちがいにはいえない。ちがう。わからない。

その他（ ）。

- (6) この頃は農家でも高等学校へ子どもをやるようになってきているが、百姓をやるなら中学校だけで、けっこうだ。

そうだ。いちがいにはいえない。ちがう。わからない。

その他（ ）。

- (7) 昔の教育には修身があり、軍隊教育があつてよかったが、戦後はそれがないからだめだ。

そうだ。いちがいにはいえない。ちがう。わからない。

その他（ ）。

- (8) いくら民主主義の世の中になっても、子どもの結婚には親の諒解が必要だ。

そうだ。いちがいにはいえない。ちがう。わからない。

その他（ ）。

- (9) 婦人議員はあまり役に立っていないし、投票の際には夫唱婦随するという実情だから、婦人は選挙権を返上してもよい。

そうだ。いちがいにはいえない。ちがう。わからない。

その他（ ）。

(10) 君が代は日本の国歌だし、日の丸は国旗である。だからそれに反対したりするよ
うなものは愛国心がない。

そうだ。いちがいにはいえない。ちがう。わからない。

その他（ ）。

< 経 営 主 >

(1962.3)

氏 名 ()

年 令 () 学 歴 ()

耕作反別 () 町 () 反

家 族 数 () 人 支柱労働力 () 人
子 ども ()

I 生産に関して

(1) お宅の耕地経営面積は () 町 () 反歩ですね。

農業以外の仕事はおやりになりますか。

Yes .no.

昨年春からいまで、どんな仕事をどの程度おやりになりましたか。

労賃は1日いくらぐらいでしたか。

円

(2) 今の時勢で、お宅の場合、農業収入だけで一家が食っていく、ということでは
きないものでしょうか。

can.

cannot.

もし、農業一本で食っていくとなったら、経営農地をどのくらい必要とするで
しょうか。

(3) お宅の場合、農業収入だけでは足りないとするば、これからどういう方法でそ
れを補っていられるつもりですか。

(イ) 他産業に従事する。

(ロ) 資本投入で生産性を向上する。

(ハ) 経営面積を拡大する。

(ニ) その他

S Q 1) (イ)に相当する人に――

不景気で働き口が見つからなくなったらどうしますか。

(ロ)に相当する人に――

資金をどうしてねん出されますか。

2) 将来の不安やなやみがあれば、そのことについて聞かせて下さい。

(4) それでは次のことについてお尋ねしたいのですが。

① 肥料代は、反あたりどのくらいつかわれますか。

円 ～ 円

② 反あたり1人の人間が働いたことにすると、米がとれるまでに何日間働いたことになりますか。

日 ～ 日

③ 農業簿記とか、それにたようなものはつけておられますか。

yes. no.

④ 米価のきめ方については御存じだと思いますが、米価審議会がこんど非公開になるとかいられていますが、そのことはご存じですか。

yes. no.

S Q yes の場合

何でお知りになりましたか。

(5) 昔は「百姓には学問はいらん」とよくいわれたものですが、そのことは、今でもあてはまるでしょうか。

(イ) 今でもあてはまる。

(ロ) そんなことはない。

(ハ) その他

S Q とくに(ロ)に相当する人に――

それはどうしてですか。

(6) 近ごろでは、八田でも、若い人達は、農業をやらないで、勤めに出たり、働きに出る人が多くなりましたが、そういう傾向についてはどう思っておられますか。

(イ) 止むを得ない。

(ロ) 農業がすたれる。

(ハ) いまはいいが不景気の
ときにはどうなるだろう。

(ニ) その他

(7) あなたのお子さんの代にも農業をやらせたい、と思われますか。あとつぎの方の職業ということになりますか。

(8) そうすると、お子さんの学校教育は、どの程度までのことを考えておられますか。

	中 学	高 校	短大・高専	大 学
長 男				
次・三男				
長 女				
次、三女				

(註、男女の区別、長男と次、三男の区別の有無に注意)

(9) 子どもさんを農業以外の職につかせるとすれば、どういう仕事を御希望ですか。

男の場合	女の場合

(10) いま、その筋の専門家を呼んで話をきくとすれば、どんな話をもっとも聞きたいと思われますか。

① 日本経済はどうなるか。

⑥ 農薬と肥料

② 税金のしくみ

⑦ 農業経営の合理化と農業簿記

③ 貯金と株

⑧ 子どもの教育

④ 農業の機械化

⑨ 政府の農業政策

⑤ 人生と宗教

⑩ 国際情勢

< 婦 人 >

(1962. 3)

氏 名 ()
年 令 () 学 歴 ()
耕作反別 (町 反 畝)
家 族 数 (人) 支柱労働力 (人)
子 ども ()

(1) 御主人が兼業に従事することをあなたはどのように考えますか。

- ① 農業だけでは食べていけないから、仕方がないと思う。
- ② どこの家でもそうしているから、当然だと思う。
- ③ 農業は停滞産業だから兼業に従事するほかないと思う。
- ④ 農業は発展性がないから将来は離農する事を考えている。
- ⑤ その他。

(2) あなたは次に記す農作業をどの程度やっておられますか。

主動的に○, 共同して△, 補助的に×,

- | | | |
|-----------|--------|---------|
| 1 苗代準備 | 5 除 草 | 9 稲刈り |
| 2 本田耕起 | 6 農薬撒布 | 10 もみすり |
| 3 田 植 え | 7 施 肥 | 11 出 荷 |
| 4 中耕(中うち) | 8 稲架準備 | |

(3) お宅で御主人または、あなた自身がしておられる内職または兼業がありますか。
また農閑期に出稼ぎに行かれることはありませんか。どういう動機から始めましたか。

SQ そうした場合、子供さんの教育や養についてどんな配慮をしておられますか。
炊事その他の家事についてはどうですか。

(4) 兼業農家では、主婦労働は専業農家の場合よりも過重になりがちだと思いますが、お宅ではどうですか。

- 1 他に農業従事者がいるから大したことはない。
- 2 農業経営に追われ、洗濯、裁縫などの家事がとかくおるすになりがちだ。
- 3 両立させる必要から家事の合理化を計っている。→

4 夫の帰宅後は、つとめてその協力をうるようにしている。

5 その他→

(5) 現在お宅の農業収入および農外収入は一年間におよどれくらいですか。

a 知らない。

b きわめて漠然
としか知らない。

c 口外したくない。

米 円くらい。

野菜収入 円くらい。

畜産 円くらい。

その他 円くらい。

農外収入(何と何から)

円くらい。

(6) 農業を採算のとれるようにするために何が最大の障害となっていると考えますか。

1 米価が低すぎること。

2 農地が狭いこと。

3 肥料その他農業用器具資材が高いこと。

4 北陸地方の季節が悪く、冬期の生産ができないこと。

5 資本投下のための資金供給が不足していること。

6 その他→

SQ そういった障害をとり除いて割の合う農業とするためには、どうすればよいと考えますか。またどのような計画をたてていますか。

(7) [30才以下の主婦に対して]

あなたは家計をまかされていますか。

a) まかされている。

b) まかされていない。

↓
いつから

↓
その理由

SQ1 (まかされていない者に対して)

家計をまかされたら改善しようと考えていることはありませんか。

(衣食住を中心に)

(家計をまかされている者に対して)

SQ2 今直ぐできないという壁は何ですか。

(8) あなたは家計支出について予算をたてていますか。

- a) 年間、月間の両方とも予算をたてている。
- b) 月間の予算をたてている。
- c) たてていない。

SQ1 たてていない理由は？

- 1 予算をたてても守れないから。
 - 2 収入がきまっていないから。
 - 3 おおよその見当がついているから。
 - 4 その他。
 - 5 特に理由なし。
- (面倒だから)

SQ2 予算をたてることによって、家計の合理化がどのように可能になりましたか。

(9) 農業をやっている時、わからないことがあったり、困ったことがあったとき、先ず誰に相談しますか。

適当な相談相手がありますか。

(10) 部落の会合（農協の会合を含めて）には 御主人とあなたとどちらが出席しますか。

- a) 主として主人。
- b) 主として自分。
- c) どちらともいえない。
- d) その他。

SQ 万惣引のときはどうですか。

- a) 夫
- b) 自分
- c) どちらともいえない。
- d) その他。

(11) 今まで村の運営は何といっても男の人が中心だったと思いますが、婦人の立場として是非実現したいと思っていること、或は努力していることはありませんか。

(12) 国民年金について聞いたことはありませんか。

これについてどう思っていますか。

SQ 年金や健康保険制度が充実した時はあまり貯金の必要がないという意見もありますが、どう考えますか。

(13) 冠婚葬祭の簡素化という事がいわれていますが、この村の場合、具体的にどんな点をとりあげるべきでしょうか。

a) 結婚について

b) 村祭について

c) 葬式について

SQ1 これらの問題についてこれ迄婦人会やグループなどで話し合いをし努力したことはありますか。

SQ2 これまで成果の上らなかった最大の障害は何であったでしょうか。

(14) 子どもの教育について、あなたはどの程度してやりたいと思っていますか。

a) 長男について

b) 次、三男以下について

c) 娘について

SQ 高等学校には、希望者を全員入れるようにして貰いたいという意見がありますが、あなたはどのように考えますか。

(15) あなたはP.T.Aの会合に出席していますか。

a) よく出席する。

b) たまに出席する。

c) ほとんど出席しない。

SQ1 (a, bと答えた人に) 出席の理由は?

1 子どもの教育は大切だから。

2 社会の事をいろいろ知りたいから。

3 他人から誘われるので。

4 おつき合いで。

5 息抜きになるから。

6 その他。

SQ2 (cと答えた人に) 出席しない理由は?

(6) P.T.Aの運営をどう思っていますか。

小

中

a) 満足に思う点

- 1 学校の教育方針がよく分る。
- 2 家庭教育その他子供の教育について教えられる。
- 3 いろいろ新しい知識が得られる。
- 4 母親同志話し合いができる。
- 5 息抜きになる。
- 6 その他。

b) 不満に思う点

- 1 先生が親身になって話し合ってくれない。
- 2 集る顔おれが決まっていて新味がない。
- 3 発言が片寄っている。
- 4 会合の時間が長すぎる。
- 5 役員の話聞くばかりだ。
- 6 寄付金集めの会になっている。
- 7 その他。

(7) あなたは婦人会に入っていますか。

a) 入っている→動機

.....

b) 入っていない→そのわけ

.....

S Q 1 八田では、婦人学級があまり振わないようですが、何故だと思いますか。

.....

S Q 2 婦人学級で勉強するとすれば、さし当ってどんな課題を希望しますか。

.....

< 青 年 >

(1962. 3)

氏 名 ()

年 令 (才)

農 業 (町 反)

通 勤 ()

家 族 (人)

I A 【農業青年に対して】

(1) お宅の耕地経営は () 町 () 反歩ですね。

農業以外の仕事(たとえば出かせぎ)はおやりになりますか。

yes.

no.

昨年春から、いままで、どんな仕事をどの程度おやりになりましたか。

労賃は1日いくらぐらいでしたか。

円

(2) 農業について、次のようなことをお尋ねしたいのですが。

① 肥料代は反あたりどのくらいつかわれますか。

円 ～ 円

② 反あたり、1人の人間が働いたとすると、米がとれるまでに何日間働いたことになりますか。

日 ～ 日

③ 米価のきめかたについては御存知だと思いますが、米価審議会が、こんどから非公開になるとかいらわれていますが、そのことは御存知ですか。

yes. no.

SQ yes. の場合――

何でお知りになりましたか。

(3) あなたは、今後ずっと農業をつづけるおつもりですか。

① つづけるつもりだ。

② つづけるつもりはない。

③ まだわからない。

SQ そのあなたの方針には、お父さんとか、お家の方は賛成ですか。

(4) a ((3)で①と答えた人に)

(i) 将来の計画なり、構想なりについて話してくれませんか。

(経営面積、経営形態、多角経営等について)

(ii) そういうことを実現していくためには、資金その他でいろいろむずかしいこともあると思いますが、その点はどう考えておられますか。

b ((3)で②と答えた人に)

(i) それは何故ですか。

(ii) どういう仕事につきたいとお考えですか。

また、その見込みはありますか。

(iii) そのさい、農地はどうなさるつもりですか。

c ((3)で㊦と答えた人に)

どうしてきめかねておられるのですか。その辺の事情を話してくださいませんか。

I B [通勤青年に対して]

(1) これからも、ずっといまの職場におつとめになりますか。

① yes. ……将来の見込みはありますか。

② no. ……
なぜですか。
いつごろまで。

③ わからない。

(2) (長男だけに) お宅の農業については、今後どのようになさるつもりですか。

- ① 親がやれなくなったら雇農する。
- ② 結婚して妻にやらせる。
- ③ 経営規模を縮小する。
- ④ 適当な時期に田畑をうって脱農する。
- ⑤ その他。

(3) この八田でも、若い人達は、あなたのように、農業をやらないで、つとめに出る人が多くなりましたが、農業がどちらかといえばすたれていく心配があるわけですが、どんなものでしょうか。

(4) あなたの賃金は、同年輩の友人などにくらべて高い方ですか、安い方ですか。
自分の働きに見あう賃金としては、いくらぐらいほしいと思いますか。

(5) 今年もほうぼうの労働組合で、賃上げ斗争をやっていますが、あなたは賛成ですか。反対ですか。

S Q 賃上げのためにストをやるということに対しては、どういう御意見ですか。

(6) 今の職場で、あなたが不満に思ったり、なやんだりしていることはありませんか。

ある ない

たとえばどういうことですか。

そういうとき、誰をいちばんたよりになさいますか。

II 〔全部の人に〕

(1) 戦後、八田では、その当時の若い人々によって農地改革やその他村をよくするための仕事がなされてきましたが、いま、青年の皆さんで、八田や森本のためにしなければならないと考えておられることがありますか。

あ る……どんなことですか。

どうしたら実現すると思いますか。

な い…… (negative な理由)

(2) (農業青年だけに)

八田の農協のしくみや活動については、いまのままでよいと思いますか。

よ い

改める必要あり……どういう点ですか。

(3) 憲法改正問題についてはどういう御意見ですか。

賛 成……なぜですか

反 対…… ”

わからない

(4) 毎日仕事をしておられて、学校時代にもっと勉強しておけばよかった、と思うようなときはありませんか。

あ る……どういうときに

な い

(5) このごろ、自分から勉強したり、技術を身につけたりしようとしてなさっていることはありますか。

あ る……どういうこと

な い

- (6) これから習いたいとか身につけたいと思っておられることはありませんか。

あ る……どうということ

どういう方法で

な い

- (7) 青年の学習のためには、青年学級というものがあるわけですが、これまで、青年学級で話しあったり、学んだりしたことで、役に立ったことがありますか。

あ る……どうということ

な い

- (8) 最近、職場青年学級、とか中央青年学級で、なかなか充実した活動をしていることが新聞などに 出ていますが、八田や森本の青年学級の今後のあり方について、何か意見をおもちですか。

- (9) 最近、あなたのクラブではどんなことが一ばん話題になりましたか。

クラブについて日頃思っていることや、御意見・希望があったら、おっしゃってくだせせんか。

- (10) あなたの信頼する政治家は誰ですか。

- (11) 青年を相手とする社会教育について

公民館や教育委員会に対して注文したいことがあったらおっしゃって下さい。

そのことを実現するには、どうしたらよいとお考えですか。

第三次調査共通問題まとめ

〔A〕

- (1) 政府や農林大臣は農民の立場を真剣になって考えてくれているから農業政策についてわれわれがあれこれと心配する必要はない。

年 令	～19		20～24		25～29		30～34		35～39		40～44		45～49		50～		合 計	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
(そ 　 a 　 だ)			1						1		1		1				4	
(い 　 b 　 いには)	1		5	3	1		1	1	4	2	2	1	2		1		24	
(い 　 c 　 え 　 ない)																	17	7
(ち 　 d 　 が 　 う)	2	2	3	2	1	1	2	2	2	3	2	2		1	2		27	
(わ 　 e 　 からない)			1			1		1									14	13
(そ 　 f 　 の 　 他)													1		1		3	
																	0	3
																	2	0
	3	3	9	5	2	2	3	4	6	6	4	4	3	2	4		60	
																	34	26

〔25～29の男の2名は25才の青年。20～24の女のうち2名は24才の主婦〕

(以下同じ)

- (2) 町会議員や国会議員は、選挙によって選ばれているのだからそういう人達のやることにとにかく文句を云うべきではない。

年 令	～19		20～24		25～29		30～34		35～39		40～44		45～49		50～		合 計	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
a			1		1		1		1		2	1	1	1			9	
b	1	1		3	1	1		3		2		2					14	
c	1	2	8	2	2		2	2	3	3	2	1			3		31	
d	1							1		2		1					5	
e															1		1	
																	0	1

(3) いまの憲法はアメリカからおしつけられたのだから改正すべきだ。

年 令	～19		20～24		25～29		30～34		35～39		40～44		45～49		50～		合 計	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
a			1				2		2			2		2	3		12 8	4
b	1		3	1	1	1		1	1	1	1						11 7	4
c			1	3					1	1							6 4	2
d	2	2	1	4		1	1	3	2	4	1	1	2		1		25 10	15
e			1		1						2	1	1				6 5	1

(4) 米の値段は政府が決める立前になっているのだから、農民がむしろ旗を立てて要求運動をするのはよくない。

年 令	～19		20～24		25～29		30～34		35～39		40～44		45～49		50～		合 計	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
a			1	2								1					4 2	2
b	1		2						1	2			1	1			8 5	3
c	2	2	5	4	2	2	3	3	5	3	4	3	3	1	2		44 26	18
d								1									1 0	1
e				1						1				1			3 1	2

- (5) 百姓は食うだけは困らないし誰にも父がねしなくてもいいから、サフリーマンにくらべていい職業だ。

年 令	～19		20～24		25～29		30～34		35～39		40～44		45～49		50～		合 計	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
a			1	1			2	1	2	1		1		2			11	5
b	1	1	5	3		1			2	3	2	1	2		2		23	14
c	2	1	3	2	2	1	1	3	2	1	1	2	1		2		24	14
d										1							1	0
e											1						1	1

- (6) この頃は農家でも高等学校へ子どもをやるようになってきているが百姓をやるなら中学校だけでけっこうだ。

年 令	～19		20～24		25～29		30～34		35～39		40～44		45～49		50～		合 計	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
a	1						1		1	1		1	1	1	1		8	5
b						1			2	1							4	2
c	2	3	9	5	2	1	2	3	3	4	4	3	2	1	3		47	27
d																	0	0
e								1									1	0

(7) 昔の教育には修身があり、軍隊教育があつてよかったが戦後はそれがないからだめだ。

年 令	～19		20～24		25～29		30～34		35～39		40～44		45～49		50～		合 計	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
a	1		3				2	2	1	2	3	3	2	2	3		15	24 9
b			2	4					1	3	2		1				7	13 6
c	2		2	4	2	1	1		1								8	13 5
d		1		1		1		1		2							0	6 6
e									1		1		1		1		4	4 0

修身そうだ
軍隊教育
ちがう

修身そうだ
軍隊教育
いちがいにいえない。

軍隊
修身
ちがう
そうだ

(8) いくら民主主義の世の中になっても、子どもの結婚には親の諒解が必要だ。

年 令	～19		20～24		25～29		30～34		35～39		40～44		45～49		50～		合 計	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
a	2	3	7	4	1	1	2	3	4	4	3	3	1	1	3		23	42 19
b	1		1	1		1		1		2		1		1			2	9 7
c			1		1				1								3	3 0
d																	0	0 0
e							1		1		1		2		1		6	6 0

- (9) 婦人議員はあまり役に立っていないし投票の際には夫唱婦随するという実情だから、婦人は選挙権を返上してもよい。

年 令	～19		20～24		25～29		30～34		35～39		40～44		45～49		50～		合 計	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
a			1				1				1	2		1	1		7 4	3
b									2			1	1				4 3	1
c	1	3	7	5	2	2	2	4	4	3	3	1	2	1	2		42 23	19
d	2									3							5 2	3
e			1												1		2 2	0

no answer.

- (10) 君が代は日本の国歌だし、日の丸は国旗である。だからそれに反対したりするようなものは愛国心がない。

年 令	～19		20～24		25～29		30～34		35～39		40～44		45～49		50～		合 計	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
a	1	1	7	2	1	2	2	2	5	3	3	4	2	2	4		41 25	16
b	1		1	1			1	1		2							6 3	3
c	1	1	1	1	1			1	1				1				8 5	3
d		1		1				1		1							4 0	4
e											1						1 1	0

年齢ごと「そうだ(a)」の数

年齢 a	～19		20～24		25～29		30～34		35～39		40～44		45～49		50～		合 計		順 位
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	
(1)			1						1		1		1				4	3	9
(2)			1		1		1		1		2	1	1	1			9	6	6
(3)			1			2		2			2		2	3			12	4	4
(4)		1	2								1						4	2	9
(5)		1	1			2	1	2	1		1		2				11	6	5
(6)	1					1		1	1		1	1	1	1			8	3	7
(7)	1		3			2	2	1	2	3	3	2	2	3			24	9	3
(8)	2	3	7	4	1	1	2	3	4	4	3	3	1	1	3		42	19	1
(9)			1			1				1	2		1	1			7	3	8
(10)	1	1	7	2	1	2	2	2	5	3	3	4	2	2	4		41	16	2
																	162		
																	91	71	

「わからない(d)」の数

年 令	～19		20～24		25～29		30～34		35～39		40～44		45～49		50～		合 計	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
(1)		1			1		1										0	3
(2)	1							1	2		1						1	4
(3)	2	2	1	4		1	1	3	2	4	1	1	2		1		10	15
(4)								1									0	1
(5)										1							0	1
(6)																	0	0
(7)		1		1		1		1	2								0	6
(8)																	0	0
(9)	2								3								2	3
(10)		1		1				1	1								0	4
																	50	
																	13	37

	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)	(7)	(8)	(9)	(10)	合計
a	4	9	12	4	11	8	24	42	7	41	162
b	24	14	11	8	23	4	13	9	4	6	116
c	27	31	6	44	24	47	13	3	42	8	245
d	3	5	25	1	1	0	6	0	5	4	50
e	2	1	6	3	1	1	4	6	2	1	27

昭和三十八年三月二十日印刷

昭和三十八年三月二十五日発行

金沢市大手町一

編集兼発行者 金沢大学社会教育研究室

金沢市大手町二八

印刷所 株式会社 橋本 確文堂